

4256

特 11

638

勝 諺 藏 著作
脚 演 本 劇
新 編 三 枝 譚

全 九 幕

088607-000-2

特 11-638

新 編 三 枝 譚

勝 諺 藏 / 著

M26

DBJ-0266



特 11
638

脚演
本劇

新編

三

枝

譚

續九幕

序幕

外山八幡鳥居先の場

二幕目

釋迦山天眼寺の場
梅澤右京屋敷の場
地藏繩手相肩の場
狹章川山津浪の場

三幕目

三枝家長局の場
同奥庭捕物の場
渣涼殿吟味の場

四幕目

梅澤右京切腹の場
土芥山蘇生の場

五幕目

椎木村銀杏茶屋の場
農夫民藏諫言の場

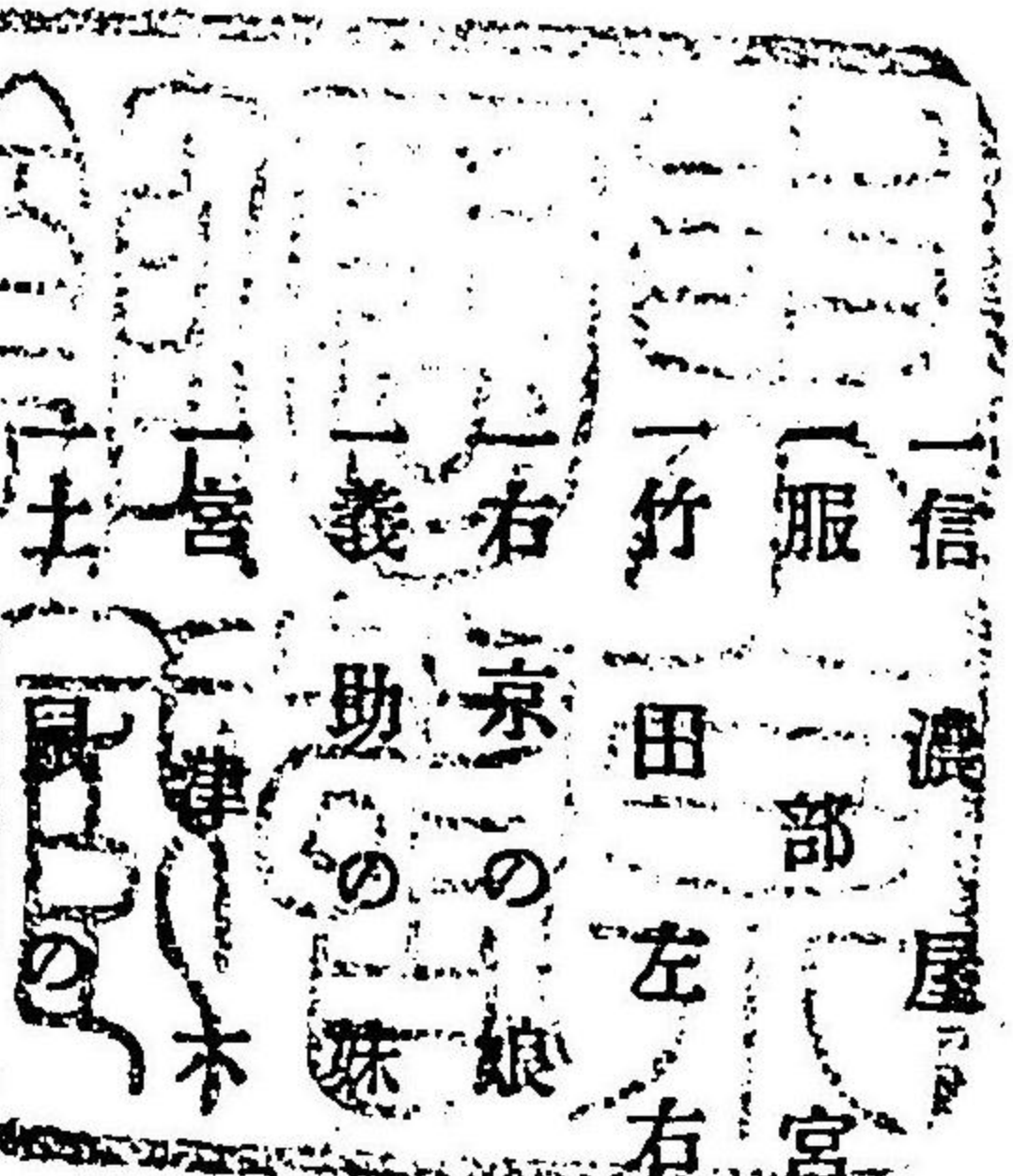


- 六幕目 千隈村民藏住家の場
松崎船渡しの場
- 七幕目 狭草川下流島山の場
- 八幕目 霜河原刑罪所の場
- 大詰 三枝秋政改心の場

演劇新編三枝譚

序幕 外山八幡鳥居先の場

役人替名



一信濃屋清七	一戸田權兵衛
一服部宮内	一瀧島要平
一竹田左右三郎	一茶店の婆々ね倉
一右京の娘玉里	一陶兵馬
一義助の妹お才	一渡邊金兵衛
一宮津木良次	一百姓四人
一土善太	

●本舞臺一面の解説
 中央に莫大なる石の鳥居、上下石の玉垣、正面本社廻廊を書き割りし中遠見、下手に葎簀張りの茶店、都て外山八幡宮鳥居先の体、幕の内より上手に陶兵馬、渡邊金兵衛、戸田權兵衛、瀧邊要平何れも脊割羽織大小の拵らえにて立懸り居る、下手に百姓四人平伏して詫て居る、茶店の婆々お倉挨拶をして居る、此見得在郷唄神樂囃子にて幕明く」 兵馬「イヤ」如何様に申すとも差し免すこと罷りならん」 金兵衛「コリ

ヤよツク承はれ我君今日れ鷹狩のお催ふしにつき唯今當社八幡宮別當方にて御休足中をも
 願みず」 精兵衛「此處に於て上みの政道を誹謗致し主君の御行跡を嘲罵なせしは言はふ様
 なさ不届き者」 要平「聞捨ならぬ士民が悪口イザ此上は繩かけて邸へ曳く」 兵士「
 めキリ」 四人「立あろろぞ」ト四人の諸士は詫る百姓を無二無三に引立にかゝる此間
 向ふより清七在郷商人息子の拵らえにて出て來り直ぐに舞臺に來て此中へ割て這入り」
 清七「マツ」しばらくお待なされて下さりませ」ト諸士を制して」 清「見受ますれば小
 前の百姓いかなる粗鹿を致しましてのお咎めかは存じませぬが御了簡ななされて下さりま
 せ、いらざる差出でとムりますすが私の姉もお館様の奥を勤めする中老役の靜江と申す
 るもの奥お表とは變りあれど同じ主君の御扶持を受けます因みをもちまして失禮ながらお
 止め申した譯でムりまする」 兵「スリヤ其方の中老靜江どのが」 四人「縁故の者どな
 非を世間へ觸れるやうなものをゆるモウ了簡しておやり下さりませ」 兵「ナニ上みの非
 とと」 四人「何を以て非と申すぞ」 清「サア非ではムりますまいか當時お上みの御政
 事は日を追ふて苛酷に流れ民百姓等を蠅虫同様に覺しめされ既に今歳五月の五日端午の節
 句夕刻に御城下市中のアノ大火事も實に領主の仰せにて火を放ちてお慰さみになされたど

の事尙其上にお諫めなさる忠義の方々を或と遠ざけ逆らふものは無慈悲にも是を誅する杯
 とあるとわらゆる不道の行爲何はら蠅虫同様なお下の者でもお上みを少し位は怨むの毛別
 に無理ではムりますまい」 兵「ヤア御城下に住居なし」 金「領主の蔭にて生活の道を
 立て居りながら」 兵「上みを惡逆非道なりと」 要「我等に對して不禮の詞」 兵「用
 捨はならぬ」 四人「覺悟ひろげ」ト双方より屹度なるを清七止めて」 清「コリヤ何とな
 されます」 兵「サ、主君を蔑如なす憎くさ下人」 金「手討に致す」 四人「覺悟致せ
 ト刀を抜かけるを」 清「モウシお武士様手討にするの御成敗のと持たが病ひの帯刀
 へ對して定めて言ふのであろうが憚りながら下人でも少許は腕に覺えのたしなみ此方は
 無手でも貴公方のお腰の物を拜借してお相手にもなりませうが町人風情の私に万一敗れを
 取つた日には刀の手前世間へ對し外聞にも關はる事且は祿を頂だけは主君に捧げし武士の
 一命其生命を輕々しう萬一ことでも在つた時何の生命で御奉公をなされます」 四人「
 ヤア」 清「サア逆も命を捨る氣なら死ぬる覺悟で主君をお諫めなされて忠臣の名を遺す
 が武士たる者の本分其處等にお心のつかぬとは御領主様も失禮ながら良い御家來をお持な
 されましたなア」 兵「エ、返すぐも不禮の一言」 金「モウ料簡が」 四人「相成ね
 と」ト四人等しく切てかゝるを清七無手にて一寸立廻る百姓四人はウロ／＼として居る此

時正面鳥居の内より服部宮内春割羽織袴大小の袴らへにて出て来り」
 宮内「マツく何れもお控えなされい」ト諸士を支ゆることあつて」
 宮内「清七と申すは其方か」
 清「はい私が信濃屋の清七にムリ升る」
 宮「唯今彼れにて承はりしが汝が言葉實以て道理に適へり何と言れても我君を大切と思はれは些細な事を取り上げて」
 兵「デハムれども町人の分際にて」
 金「餘りと申せば我君を」
 宮「サ、夫も平生より主君の御行跡の正しければ誰か誹謗の仕まつらうや」
 四人「ぢやと申して士民の身にて」
 宮「ハテ何事も拙者にお任せあつて各々方にはお引取り下されい」
 兵「免し難き奴なれども服部氏のお詞ゆる」
 妻「穩便に致すでムろう」
 清「左様ムれば服部氏お先さへ参るで」
 四人「ムりませう」ト四人は鳥居の内へ這入る百姓四人は前へ進み出で」
 百姓「〇」れ薩で危うい生命をば助かりまして此様な嬉しいこととムりませぬ」
 夫「夫で之儂等之飯にましても」
 四「だいいじムりませぬかいさア」
 宮「チ、其方共は早く歸れ」
 四「はいく有難うムリ升る左様なればお侍様」
 〇「信濃屋の若旦那」
 四「ね先さへお暇」
 四人「致しませう」ト百姓四人下手へ這入る宮内は思入あつて」
 宮「イヤナニ清七とどのとやら唯今承れば御身は御中老静江どのの御舍弟なる由」
 清「へいいかにも静江が弟にムリ升る」
 宮「さればこそ町人ながら一ト理屈ある今の詞宮内感心の致してムるわい」
 清「

イヤモウ若年者の跡先見す左様に仰せ下されては面目次第もムりませぬ」ト此時お倉こなしあつて」
 お倉「イヤ旦那様がお褒めなさるの御道理お前さんが来て下さつたので老嫗も連係をのがれました、チ、其懸り合ひで思ひ出した婆々が家に預かつてある糸が大分ムるおまへさんの買廻りに見えるのを待つて居た所何うぞ内へ来て見てやつて下さりませ」
 清「夫は毎度憚かりさま左様なら糸を見せて貰ひませうか、併し今日計らざる御厚情に預かり無難に事の濟ましたも貴所の庇蔭此お禮には改めてお邸へ出ますのでムリ升る」
 宮「何の左様いこれでは却つて拙者恐れ入るが亦時折は予が宅へも来てくりやれ」
 清「ハ、何れ近日お伺ひ申升るでムリ升る」
 宮「サ、拙者に構わず遠慮なくムつて能くムる」
 清「左様ならば御免を蒙むるでムリ升る」トお倉清七と茶店の内へ這入る宮内後を見送り」
 宮「若輩なれども町家の者には似合ざる器量者夫に就けてもお家の成行き行く末が案ぢらるゝ事じやわい」ト歎息のこなし此時向ふより左右三郎着流し大小、玉里文金島田鬘振袖屋敷風の娘の袴らへにて出て来るを宮内を見て」
 宮「アイヤ夫へムるは左右三郎殿に梅澤の御息女玉里どのではムらぬか」
 左右三郎「チ、誠に貴殿と宮内様父には君の御不興蒙むり遠慮中故他出は甚だ濟まざる次第にムれども何卒君がお心相らさ父の不興御赦免あるやうと弓矢神なる當八幡宮へ忍び参りの途中にて是なる玉里どのにお出遇

申して同道なしたる譯でムる」 玉里妾とても父上様のお身の上早う御赦免なりませうや
 うと神に祈りの歩みを運ぶ路のせにお目にかゝつて此様に同道いたしてムリ升る」 左
 遊山遊興なごとの思召もムリませうが」 玉里「全たく神へ願ひの爲めゆる」 左「必らず
 御疑念なきやう御推量」 左玉里「下されませ」 宮「ハテ何の御遠慮御兩人のお心は素
 より某存じ居る、然る然りながら竹田梅澤の御両所が諫めを入れしを科とあつて今は盤居
 の御身の上是皆佞人輩の奸策より出たる事に相違なければやがて汚名の雲霧も晴れる時の
 ムらう程に氣を落さぬ様御赦免の日を相待れヨ」 左「御厚情なる其お言葉」 玉里「唯御
 赦免の御沙汰のあるを」 左「相待のみに」 両人「ムリ升る」 宮「併しながら唯今君
 には神職方にて御休息の折柄なれば兎や角うあつてお爲めにならず拙者が能きに案内を
 致せば予と一緒お斯うムれ」 両人「有難う存じ升る」 三人鳥居の内へ這入る是を在郷
 唄に成り向ふよりおオサラ毛の鬘留袖の在所娘の拵らへにて生糸を包みし風呂敷包みを抱
 へ、其後より土鼠の善太道楽者の拵らへに出て來り」 善太「コレサねオさん此善太が聲
 かけて居るのに何も然らツン／＼として行く事とねへじやねエか一寸と待てくれたが宜い
 」 善「何の用かは知りませぬが妾は少と急ぐ用で」ト言ひながら本舞臺へ來る」
 善「ハテマア待てくれと言ふに」 善「何の用があるのでもムんすといなア」 善「何々然

う素氣なくするには及ぶぬ貴様の兄貴の義助とは古い馴染の此善太マア／＼愛へ掛る宜い
 「ト床几に腰を掛させ」 善「チイおオさん何も是は世辭でも追従でもねエが其お前の標致
 をばめらながら夏と植附け秋と亦蒔込みの収り入れのと其間に之蠶の糸操年が年中働らく
 ばかりも智恵がねエ愛は物と相談だが何と諾といつて乗る氣はねエか、コレサ顔を反ける
 事はねエ其相談といふのこ出世の緒、和女も知つて居るであらうが以前乃公が勤めて居た
 官津六郎次様が未だ和女が中老静江さんの部家方で居た時分に一ト目見てぞッこん惚れた
 どのお詞にて近しう和女の家へ遊びに行き善太もえ何うか貴様の働らきにて拙者が奥にな
 るやうに所持てくれまいかと心から底から乃公への頼み、サア是を和女がウンといふて得
 心すれば和主の出世と知れた事夫につながら兄貴の義助も浮み上るといふものた、コリヤ
 實に眞剣の談だソレ嘘でないといふ証據はコレ此艶書だ、ト其人の中より手紙を取り出し
 是に旦那の心の丈は詳しく書てあるといふ事だ兎も角も艶書を讀んで見ろ」 善「モウシ
 善太さん見る蔭もない此妾に夫程迄に言ふて下さる宮津様の御親切と有難うムんすが妾し
 はお武家様は嫌いでムんすわいなア」 善「夫じやア是程頼むで居る乃公の顔を潰すのだ
 な」 善「然うではなければ今言ふ通り此事ばかりと」 善「モウ宜いは左様強情に吐す
 なら手込にして引張て行にやアならねへ」 善「ソリヤお前無理じやわいなア」 善

無理と合点、サア乃公と一緒に來やアがれ「トお才の手を取り引立にかゝるお才と振り切り逃げやうとする一寸立廻り此間に茶店の内より以前の清七出て來り善太を突廻して見事に投げのけるお才は嬉敷き思入にて清七の背後にかくれると善太は起さ上り」
 善「ア、崖いゝ何處の何奴だ此善太様を手込めに此處へ轉ばしやアがつた斯う投げられちやア料簡がならぬのだ「ト清七を見てワリヤ義助の内で見覚えのある糸仲買の青二才何故横合から出やアがつて此善太を投げたのだ」
 清「ナ、投げた譯は他でもない此女は余の女房良夫あるものを手込にして其上ならず他所外へ不義を執持つ無理所望餘り無法な奴ゆゑに夫で小荷が投げたのだ」
 善「ム、」
 清「イヤサ亭主のある女をば得心もさせいで自儘に男を周旋ても事が濟と思ふて居るか萬一汝の勤めに隨が他の男に引附たら女と素より汝さんも首と胴に着ては居ぬぞへ」
 善「サア在う聞てみると貴様の憤るも尤もだが其様な咄しは義助の内でも少許も聞た事がないゆゑ談しをして見たのだわい」
 清「イヤ假令聞ても聞いでも本人同士が確かな証據町人ながらも男の端くれ是から貴様を引ばつて宮津様の邸へ行き充分臺詞を爲にやならぬのじや」
 善「ハテ夫では物に角が立つわい乃公が双方の立やうに捌きをつけるから待てくれ」
 清「そんなら貴様が捌きを付けるか」
 善「宜いわい酷らゐものに引かゝつたわい」
 清「強さながら上手へ這入る清七迹を目送り

ハ、到頭往て仕舞ひ居つたわい「ト此時お才前へ出て」
 清「モウシ信濃屋の若旦那様能い所へお出下されました妾と何うある事やらと氣を揉むで居りましたわいなア」
 清「夫と其善の事」ト此時傍に落てある艶書を見て「此艶書は何うしたのじや」
 清「サア夫は宮津様から私へとて善太が持つて來たのでムリ升わいなア」
 清「アノお方も眞面目な顔で濡文とは有難い亦何どの役に立う後で慰みに讀むで見ませうわい」
 清「懐中する」
 清「夫にしても若旦那好い折に爰へお出でムりましたなア」
 清「サア今日は商賣をかけて八幡様へ參詣に來たに依て此茶店に立寄つて村の衆が預けて置た糸を調べて居る所今のワツばさッば見ても居られず飛むで出て口から出任せ女房と言ふたは眞個の間に合ひ詞厚顔しい奴と決して悪ふ思ふて下さんな」
 清「仮令虚言でも女房じやと言ふて下さんした其時の妾しの嬉し」
 清「ト羞かしさこなし」
 清「そんなら私のやうを男でも女房になつてくれといふたらお前とウンと言ふて下さるか」
 清「妾しと夫が願ひでムんすわいなア」
 清「夫では眞個の女房に」
 清「オ、奇りたいと申升も厚かましい事をがら」
 清「ト是をなまめきたる合方に成り、不思議な御縁で貴郎様のお姉上様靜江様のお部家に上り暫らく御奉公も致して居りましたが殿様の御乱行ゆゑ暇願ひ内へ歸つて仕馴たる賤が手業の係をお店へ持つて行く度びに貴郎様をお見受け申し逆も女と産れたら彼いふやうな方様と」
 清「ト言ひ憎

い思入あつて、百姓風情の妾が何ぼう惚れても及ばぬ事と諦らめては居り升るが切て心
の内だけなりとも不便と思ふて下さりませ」 清「夫は和女ばかりでなく余も遠うからお
まへを懇望」 オ「エ、」 清「トサ思ふて居るも在所には惜きお前の器量といひ殊に兄
御の義助殿には其名に耻ぬ義堅いお人何うせ女房をもつならお前のやうな女をと思ふた心
がツイ迂かり口すべつて女房と言ふたのが論より証據」 オ「ソリヤ貴郎御眞實でムリま
すかいなア」 清「おまへ嘘に男の口から此様な事がいわれるものか」 オ「エ、嬉しう
ムんすわいなア」ト兩人寄り添ふ此時茶店の内よりお倉婆出て来る是にて兩人は喫驚し
て飛のさお倉附添ひ三人茶店の内へ這入る跡三味線入りの神樂になり上手より宮津六郎治
野袴ぶツさき大小の拵らへにて後より善太附添ひ出て来り」 六郎治「コリヤ善太して彼
の一條の首尾は何うじや上々吉か但しは凶か」 善「イヤモ大失策の大凶でムリ升」
六「スリヤ艶書まで遣わしても」 善「サアお聞下さりませアノお方には城下の生糸商人
信濃屋清七といふ青二才と夫婦約束がしてあるとの事」 六「如何様な約束があるうとも
一日武士が斯うまで思ひ込むだる望みせば遂げずば武士の一分が相立ぬ」 善「サア貴
所は然う仰ツしやるが却々先きの女も野郎も餘ッ程手強い奴でムリ升から容易に成就覺束
ないと思ひ升が夫とも貴所他に御工風がムリ升るか」 六「サニ二人が中を引裂ぐらゐに

何の手間暇入るべきぞ、なれども是は私の小事後の手段として此他に尙だ立身出世を計る
べき大望につき其方を見かけて頼みたき一義がある何と受合ふてお呉まレか」 善「出世
の種になる事なら故主へ忠義と褒美の徳と二道かけて此善太が根限りに受け合ませう、シ
テ其仕事といふは」 六「他でもおい彼の熊澤丹下殿未だお年は壯けれと主君に頼りに用
ひられ老臣とまで登庸ありしが慫に之限りのおいもので殿を押込めお家をば押領さん豫
ての企、夫に一味の我々も實は出世を致したる今其方に頼みといふは當月二十八日は先君
光政公の御命日主君に之佛をさらひ給へば御妹 君照姫君佛法歸依の事ゆゑに當主に代つ
て御菩提所天眼寺への御佛參、サア其照姫君の一條に就てじやわい」 善「シテ照姫様に
就ての一條とこ」 六「スリヤ斯様な理由ぢや、右丹下殿には照姫君を嫁てより想ひをか
けて居られたもお彼の姫君を手に入れて然して後に主家をば押領さん志ざし依て佛參の
當日好き折を見合せて姫に向つて言ひ寄らるゝは」 善「ム、成程」 六「丹下殿の心に
随ふか但しは否かの返事を聞切り万一否ぢやと申す時には人知す天眼寺の本堂なる床下へ
火を放ち照姫を焼殺すの覺悟にて萬一姫が遁れるとも表門と締切り置けば出る所は一方口
裏手は直ぐに狹章川より他に逃口あらざれば其狹章川の源は豫てより堰止る手筈にて火の
手の上るを相圖とせし堰を崩せば一時の激流水でも火でも孰ちの路命の助かる氣遣ひなし

「イヤに依て善太汝と天眼寺の床下へ忍び込み相圖を待て火をつけて貰ひたい」
 「ヤ命限り働らさず升るが此仕事は余ッぽ直打ものでムリ升せ」
 「ハテ其義は拙者が心得居る、サア是と汝への手附なれば受取て置くがよい」
 「ト金包みを遣る」
 「有難うムリ升何でも物と祝ひだから札の辻の酒屋で一盃引かけて参りませう左様ならば且那様」
 「イヤ小氣味の好い奴ぢやわい」
 「ト善太は下手へ這入ると直にバタ／＼に成り鳥居の内より以前の諸士四人左右三郎玉里の兩人を引立出て来り」
 「諸士四人不義者でムる／＼」
 「ナニ不義者でムるとな不義とあつては忍かせならずソレ何れも我君の御前へ引立さ

ッしやわい」
 「四人心得申した」
 「ト引立にかゝる此時鳥居の内より以前の宮内出て来り」
 「宮内アイヤ暫らくお待なされい」
 「トみなくを止め」
 「唯今彼れにて承はれば此兩人をば不義者ありとの咎めあるがコリヤ貴殿方の目違ひかと存じ申す」
 「兵馬イヤ／＼決して目違ひにこらぬ」
 「金兵衛」
 「現在 某 見受けし所拜殿の小隅にて厚かましくも此兩人」
 「樞兵衛」
 「密々談話の痴話狂ひに神前を汚せしゆゑ」
 「要平」
 「此處まで引出し申した」

「夫が目違ひ何れも方の粗麁千万」
 「ナニ何れもが粗麁とは」
 「宮是なる玉里左右三郎と親々より約束なせし許疎言は夫婦同前不義密通と申されまい」
 「皆々ヤア」
 「宮夫をば不義の密通のと入さる穿鑿御無用でムる」
 「ト諸士返答に息つまる」と六治郎

ズツと前に出で」
 「イヤナニ宮内どの不義でない」と仰せなさるが如何にも夫と貴殿の仰せに隨がふとも君の御意に逆らひ謹慎中の竹田梅澤然も二人手を取り合ひ他行なすは上みの掟を破ると申ものナニ是が不埒ではムるまいか」
 「宮サア其義は」
 「六私ならぬお上みの掟を破りし兩人君の御前へ引立めされ」
 「四人心得ました」
 「ト屹度成る此時清七お才の兩人茶店の内より出て来り」
 「アイヤお侍様町人風情の私が出升る場所でもムリませぬが成敗なさる方様も又れ止めなさる方も成敗お受けなされ升るお男女の方々も皆お館の御家来言ば一家中の事ゆゑに此場の事は何事も御宥免なされて上げ下さりませぬか」
 「ヤア汝町人の分際にて斯様の處へ罷り出るとは身の程知らぬ周章者武家には武家の法があるわい」
 「へい其お詞は恐れ入りましてムリ升るがホシお侍様おなれたお武家の掟をば屹度お守りなされ升るが」
 「ヤア此奴失敬千萬掟を辨へずには御奉公が勤まるものか、馬鹿な事を」
 「其御法をお守りなされ升る宮津様へ御覽に入れ

存せぬ知らぬ事だ、併しながら今日之神詣での際なれば助け置れぬ兩人なれども余が清けを以て穩便に取計らふて遣わす」 四人「スリヤ不義者兩人を」 六「是が武士の仁情だわい」 清「早速の御承知有難う存じまする」 宮「最早君の御歸館にも相成る時刻少しも早くお二人には歸宅の致しやれ」 兩人「有難う存じ升る」 清「左様なれば」 左玉「宮内様」ト左右三郎玉里立上る六郎治こなしあつて」 六「思へば」ト刀の柄に手をかけ口惜さこなしにて息さ込むを宮内見得宜く止める此時鳥居の内にて」 觸れ込「我君のお立——」ト觸れ込む」 宮内「我君様の」ト六郎治を下に据へるのが木の頭、お立でんるぞ、ト敵役の諸士ハッ云ふ、六郎治は據なく平伏する、清七お才は左右三郎玉里を脊後に圍ふ此仕組み宜敷く宮神樂に行列三重を冠せ○拍子幕

二幕目 釋迦山天眼寺の場

梅澤右京屋敷の場

地蔵繩手の場

役人替名

一徳岡村義助	一土鼠の善太
一智隈村民藏	一野良の權六

一梅澤右京	一仲間段平
一秋政公の妹照姫	一奥女中苺藻
一吉田芳齋	一同菖蒲
一熊澤丹下	一同歌浦
一宮津六郎次	一同琴柱
一同娘玉里	一所化三人
一忠僕平助	一下部四人

竹本連中

○本舞臺通りの二重、石垣の蹴込み、中央に家根附きの寺の門扉の裡は瓦燈窓のある白壁の塀、門の上下家根附の筋塀、塀の内所々に松の立樹空より松の釣枝、都て天眼寺門前の体、爰に腰衣の所化三人竹箒切手桶を持門前を掃除して居る、此見得禪の勤め本行の鴨物にて幕明く、

○ヤレ〜辛度い事じや箒目の絶ぬぬやうにせいとの番僧からの拵附なれど左様するぞ一日の間箒を放す事が出来ぬでないか

△然うとも〜今朝からはで十四五遍足も腰もメリ〜と云ふやうなわい

□「マア何にしる庫裏で一服やろうじやないか」

○「サアムらつしやれ〜」ト所化三人は門の裡へ入る、引連れて門の内よ

り片はすし髪かみの奥女中四人出て来り」

近藤「何と皆さんお館かたての内に居てご自儘ごじんぎんに町へも

出られはせず遇たまさか春の宿下りに二日か三日の我儘ばかり」

甚浦「籠かごの鳥も同前で氣の

つまつた御奉公切ごほうこうきりて今日のやうな御佛參ごぶつさんには好すきな肴さかなは啖たぐられねど」

歌通「男の顔でも

見飽みあして氣を晴はらさうと思へどもお姫様には御陰性ごいんせうのお生うまれにて御殿の内にお在あの時もお佛間

へ引籠ひっこり毎日まいにちくお經きやうばかり」

琴柱「唯主君の御亂行ごらんぎやうが納なまるやうと夫のみ御祈ごいのり遊あそば

すのみ」 近「夫よりチツとお小姓こしやうでも相手あひてにお浮うかれ遊あそべせばよいものを」

甚「妾等

はお小姓こしやうで馬うまが合あひに依よてお所化しよけさんでも引廻ひまわさうかいなア」ト此時門の内より段平だんへい和

看板かんばん一本差尻さしからげ仲間なつげんの拵しよにて出て来り」

段平「坊主ぼくしゆを墮落だらくさせるより髪かみのある當世たうせい

男おとこ此段平このだんへいを墮落だらくさせる氣はないか」

近「夫、好すかん誰たれじやと思ふたらお前は宮津六郎治

様の召使めしやうい」 三人「段平さんじやないかいさア」

段「チ、段平ともく段平が三十に

なるや成すの年輩としざい盛りサア墮落だらくさせて貰もらふかい」

近「おまへの顔を見るさえも胸むねが悪

うて」 三人「嫌いやじやないなア」

段「エ、其類そのいひ術じゆつを」ト段平四人を追おひ廻まわす女形おんながたと門内

へ逃にげげて這入はいる」

段「エ、臭くさい物身ものみ知らずと男おとこ撲ぶみも厚顔あつちやしいわいアハ、ハ、ハ、ハ、

「ト此内上手このうちうでより前幕まへまくらの善太ぜんたと權六ごんろく何れも駕昇かすまの拵しよらへにて出て来り段平だんへいに突當つたあた」

段「エ、何なにをしやアがる」ト言いひながら善太ぜんたを見て、ヤ善太ぜんたでないか駕かをかついで何處どこへ行くのだ

善「笠かさ棒ぼうめ駕かをかつぐのは乃公のうこうが商賣しょうばいだ」

段「夫おとこ然しかうに違ちがひはねエが己おのの旦那だんなも

氣きをもひで今貴様いまきさまの所へ手紙てがみをもつて行く所だ」ト手紙てがみを出す」

善「オツと好すし」其手紙そのてがみなら見るに及およばぬ」

段「舞まつて居ゐるなら例れいの一條いちじょう遅おそくなつては不可いけねへせ」

善「ハテ土風どふうの善太ぜんただ萬事ばんじを任まかして置おか宜いい、サア權六ごんろくやツつけよう」ト兩人ふたり駕かを昇あり下手うでへ這入はいるを直ただぐに門内かどより前幕まへまくらの宮津みやつ六郎ろく治ち出て来り」

六「コリヤ段平だんへい手紙てがみは善太ぜんたに相渡あひわたしたか如何いかに」

段「お手紙てがみを仰おほせの通り渡わたしましたが此手紙このてがみなら讀よむに及およばずといつて駕かを昇ありて何處どこへやら行いきました」

六「ナニ又また何れへとやら參まつたとなコリヤ氣きのもめる事ことでとある」ト此時善太ぜんた足早あしはやに出て来り」

善「モウシ宮津みやつ様さま彼かの一條いちじょうは昨夜おとよの間に人知ひとしれず本堂ほんだうの床下ゆかへ燒草やけくさを澤山たくさんに」

六「アコリヤ靜しづかに致いたせ」ト四邊よっぺへこなしめつて」隙ひまで汝おまにも申ませし如ごとく此方このあたも日外いっせより狹せま葦川あしがわの水みづ上うへを堰せきさ止めスワと申まさば切きつて落おさんやう用もち意いせり去さりながら萬事ばんじ白晝はくぢうにてと事ことを行おのふに何彼なにがと不都合ふごふあ夫故拙者おとこがが計略けいりやくを以もて姫君ひめぎみの御歸館ごきかんをば夕刻ゆふがく迄まで引延ひきのばせば今宵こんやぞ其方そのあたの仕事しごとなるぞ」

善「委細わいさいは承知おぼ致いたしましたと」ト此時以前このときよりの相棒あひぼうの權六ごんろく走り出て来り」

善「ヤイ」善太ぜんた客きやくを乗のせ九駕くわを拾ひろつて置おて何なにうするのだ用もちがあるなら後あとにすれば宜いいじやないか」

善「へら棒ぼうめ駄賃だちんは先まへ取とつておれば行いきたくハ勝手かたてにあるいて行くだらうヨ」

へせ」善「夫だつて壁でも腰抜けでもねへじやねへが」世「ところがアノ親仁は妙な奴で此領分を歩行くのが厭じやと最前も言ふたじやないか」六「コリヤ〜此領分を歩行くのが嫌じやと申したと申シテ其者は如何なる者ぢや」横「何か一向知りませぬが余ッぽと惚けた人物でムリ升る」六「イヤ變つた奴もあればあるものかな」善「夫と然うとモシ旦那御領主様の御法事とあれば定めて御馳走もたッぶりだろ何と一杯ありつく譯には行ませぬか」段「極りで酒を呑みたがるわいコリヤ〜段平兩人を庫裏へ案内してやりやれ」段「畏こまりましたそんなら二人サア來やれ」ト段平先きに二人附そひ門の内へ這入る」六「今日丹下殿の思ひ通り姫君靡さ給ふに於て之荒仕事を致すには及ばねと十に八九と六つかしからん然ある時は今日の入り日が照姫か生死の境」ト此時々の太鼓の頭を打込む」エ、輿驚を「ト六郎治喫驚するのが道具替りの知らせ」致したわい、ト宜しくこなし是を時の太鼓にて此道具ふん廻す

○本舞臺半舞臺、野面の中遠見、中央に藁葺の地藏堂、正面木連格子此内に石の地藏、所々に松の立木、すつと下手掛稻、すべて城下外れの体、爰に義助民藏の兩人百姓の拵らへにて垂簾を昇き息杖をして居る、簾の内に吉田芳齋胡麻搥揚げかすら風雅なる拵らへにて乗て居る、此見得在郷唄にて道具納る」

民藏「吾は此在所の百姓じやが今日之此城下

迄用があつて用足しに往た戻り路フツと見受けたお前の様子聞けば駕昇めが捨て置て何處へやら往きをつたとの事」義助「殊に駕から能う出もせサグズ〜して居らる、素振コリヤ足腰でも立ぬ病人であらうと思ひ氣の毒さに兩人にて爰まで昇て來たが吾輩も宿へ歸りを急げばモウ是から下て行つしやれ」芳「成程和主達も宿へ歸りも急ぐであらうが乗りかゝつた船でとない駕の事ぢや何うか此上の世話序で予の望む處まで氣の毒ながら遣つてくりやれ仔細があつて此乃公と一ト足もあるけぬのじや」民「エ、そりや酷いものに引かゝたわい」善「そんならお前は壁でも」兩人「あるのかな」芳「イヤ〜決して然ういふ譯では無い年老たれども人并より勝れて壯健な足はあれ此三枝の領分の士だけは踏ぬのじや」民「トハ又何うして」善「何ういふ理由で」芳「然れば聞さやれ惡逆無道の三枝秋政其領分の土を踏と誠實の人間たるもの、足が穢れるらの事じや」民「ア、コレ〜そりや何を言つしやるのぢやお前は何國の人か知らぬが吾等と此三枝の支配下に住む親の代からの百姓じや其御領主の悪口雜言粗忽も大概に言ッしやれ」善「殊に難義を救われながら其人の前で領主の悪口一体前は義理知らずじや義理を知らねば人間でないワ人の皮を冠つた畜生ぢや畜生を昇て此肩の汚れになるわいサア茲から駕を出て貰わふ」ト屹度なる」芳「領主の悪口しられたとて腹を立る様子を見れば少

しは脈も通ふて居ると見える悪逆無道といふた譯を聞してやろう、此三枝の領主秋政には日々夜々の放逸我儘民百姓の油を絞つて我身の奢りに費やすのみか美貌の女を撰りぬきて邸内に引入れ妾手掛と榮耀の沙汰夫のみならず城下の町に火を放ちて酒の肴に見物したとか夫程迄に暴逆非道を行なへとも謀一人諷みを入れる者もなく家中の武士は歸盗人町人百姓は昆虫同前貴様達も語こそ言へど人間の仲間にはこ入れぬ体ぢや乃公の様な眞實の人間の乗つた駕を昇といふは却々其身の果報といふもの相當の貨錢は遣ねす程に領分の堺まで跌つて違つて呉るがよいわい」ト義助は中腰になり耳を敲て聞て居たりしが俄に此時乾度なりて」 義「ヨイヤ沈着ては居られぬわい」ト起上る」 芳「落着て居ぬどと何うするのじや」 義「何うも疑うもあるものから」ト帯締めて行かうとするを」 民「コレ汝が往つては片棒に困るわい」 義「其處どころの事ぢやないわい」ト、駕を突き倒して一散に向ふへ走り退入る、芳齋は駕の裡から轉び出る、民は呆氣に取られし思入あつて」

馬「しつかり恰で」ト駕を起すのが道具替り知らせ」氣違ひの沙汰ぢやがさ」ト向ふを見込み、芳齋は思案のこなし」此仕組み宜しく在郷時の際にて此道具ふん廻す

○本舞臺平舞臺、正面上手一間小模様の際、中央一間の佛壇、白木の位牌五個列べ燈明を点しあり、此次き御袋違ひ欄、下手折廻りの茶壁、舞臺舞臺を敷きつめ白家口橋懸りども

杉戸を建切り、すべて梅澤右京邸内佛間の模様、茲に右京長髪着流しにて佛壇に向ひ回向をして居る此見得よろましく調べ合方にて道具納まる、ト上手障子家休より右京の妻小枝丸指女房の拵らへにて後より前幕の玉里附添ひ出て來り能き所に住ひ」 小枝「斯様なる事御替居中に申上る事ではふりませぬが此不慮の災ひさへムりませずば豫々約束いたせし通り娘玉里を竹田様へ嫁らせ竹田の御次男左之助殿を申受け養子となして両家とも安心をこからんと娛しもしも思ひよらざる此度びの事變左京様にも其共にも君の御不興蒙むられ情けなや閉居のお咎め娘も嘘や本意のふ思やるであらうがトサ思ふも子に甘さは親の因果御推量なされて下さりませ」 右「イヤ」何も悔む事はないわい素より主君の御身を思ひ諫言の申上げしを良薬口に苦しの譬畢竟一徹ある御性質ゆゑ左京殿初め某も斯く閉居仰せ付けられしかど君とても生得御聰明に渡らせ玉へは何時か白日晴天の身とも相成り申そう程に必らず共に悔まぬがよいわい」ト此時玉里煎茶を入れて右京の前に差出す事あつて」

玉里「モウシ父上様最前アノ平助が何やら近頃珍らしい事があるとか申て居りましたゆゑお茶受けかたぐい茲へ呼びお慰みにお咄しを」 右「ナ、左様であつたか何かは存せぬぞ承わつて見やうわい」ト是にて平助を呼ぶ、平助は小倉袴老けたる若徒の拵へにて出て來る」 右「コリヤ平助何か珍らしい事があると其方胸を致し居つたとかソハ如何様な事で

あるか此處にて咄して聞せ」 平助「へいそりや別の事でもムリませぬ前代未聞の不思議
 奇お断片ノ當國の狭草川は御領分中第一の大河にて早の年でも水底見えず雨でも一夜降り
 升ると夥たいしき増水を致しまするに關わらず當年之御存じの通り五月雨から打續き昨日
 今日迄の霖雨に狭草川は枯きつて一滴の水さへあいと申升るもシ旦那様何と珍らしい事
 ではムリませぬか」 右「拙者君の御不興蒙むり斯く引籠り罷り在る故今迄一向存せざり
 しが雨足繁き此比に當國第一の大河なる狭草川の水かれしはハテ心にかゝる事じやなア」
 ト沈思のこなしあつて」我借々考かふるに古人の語に一夫恨みを含む時は六月炎天に霜を
 飛し一婦怨みを懷けば三年雨降すといへり當年お國の政道正しからず民は運上課役に苦し
 み上は驕奢に耽り給ふ之を諫むる者あれば今某の身の上の如し出仕を止め閉居のお咎め是
 迄にお家の忠臣數知れず我君の刃の爲めに死に失せたり其御所行より思ひまはせは諸人の
 怨恨も一ト方ならず爰に到つて霖雨の期節に狭草川の水の枯しもコリヤ天然自然の理の當
 然ト此時向ふにて」 下部「狼藉者」トわやくいふ」 右「何か玄關先の騒がしき様
 子なりコリヤ平助何事なるか見て參れ」 平「畏りました」ト平助向ふへ這入る」 平助「ヤ
 ア通す事ならぬ」 義助「エ、何うあつても通るのだ」ト是をバタ／＼に成り戸家口の
 杉戸を蹴倒して以前の義助血眼になつて出て來る下部四人も平助は這るまいと支える右京

と此体を見て小枝玉里を興へ這る此内花道にてみな立廻る事あつてト、義助本舞臺へ
 來て屹度成り」 義「ム、梅澤右京といふ人に似た虫けらは此方か」ト睨みつけていふ右
 京義助の相貌を屹度見て」 右「見受けし所下賤の者と見ゆれども義氣逞ましき彼が面相
 コリヤ平助最早止むるに及ばぬ其者をズツと前へ通せ」 平「スリヤ大事ムリませぬか」
 右「チ、大事ない、シテ其方は次ぎへ立テ」ト是にて平助先きに下部は橋懸りへ這
 入る右京こそしあつて」 右「シテ其方何れの者にて如何なる仔細あつて予が邸へ參り
 しものか心を鎮めて申すがよいわい」 義「吾は御領分の徳岡村の百姓義助といふ者じや
 がチトこなたに言分があつて茲まで踏込むで來ましたのじや」 右「シテ此方に申分があ
 るとは」 義「他の事でもムリませぬが他領の奴に御領主の悪口され夫が悔しさに此邸へ
 踏み込むできましたのじや」 右「ナニ領主の悪口せられしが悔しい故に參つたと聞捨
 ならず夫には何か仔細があらう仔細を申せ」 義「此吾が悔しいといふたは他の事でもな
 い、先刻城下から戻り路計らず年老た旅の人駕の中に捨られて難義をばして居るゆゑにコ
 リヤ乗せた駕昇が大かた酒でも呑みしめ客を棄居つた事と思ひ氣の毒に思ふ矢先へ何國の
 者やら知らぬ者がまた一人來合した故其男と兩個して捨た駕をば昇さ上げて半里ばかり歩
 行て來たが其行先が知れぬゆゑ何處まで行くかと問ふたれば此三枝の領分の土は汚れて居

るゆゑに假令一ト足でも踏むのが嫌ぢやに依て十里が二十里でも他領へ入る迄驚で行ねばならぬといふて取てもつかぬ親父の返答尙夫計りでなく三枝家には人とないのか彼れ程領主が我儘非道を行のふに唯の一人異見をする者がないといふは上みを見習ふて家中の者も人の皮着た昆虫同前と口を極めた悪口雑言腹が立てく握り拳は固めたが言こい彼方が當然の理屈詞を返す事もならず、斯ういふ耻辱受けるのもお殿様の不行跡と言ふ迄もなく一ツは又御家中に諫めを入れる人がない故吾人迄が耻を掻くじや又當城内で忠臣おれ方と吾等が在所迄も聞ゑて居ると此方さんじや其お前様迄が同じ様に矢張り黙つて口出しもさッしやらぬは此方様も昆虫仲間何でも一番談判をしてと其儘跡へ引返して足に任せて遣つて來たが言ひ分といふは斯ういふ仕宜玄や忠臣賢者といわれる此方様が何で御異見さッしやらぬのじや命が惜いか但し又家祿が大切なのか百姓でこそあれ此義助はサアね國の爲といふ時と身代と愚かな事命も惜まぬ魂じや百姓連の此儀に此程迄に言れても此方と何とも思わつしやらぬか」 右「ハテ探砂中の黄金とは其方等の事をいふなるべし賤しき身柄に似合ぬ健氣の覺悟然は去りながら城内の様子を委しく存せぬと在所者故尤もなるが此三枝の藩士にも君を諫むる忠臣の決して無きにも非ざるなり」 義「在るなら何で他領の者に悪口などしられぬやう早う異見をさッしやらぬのじや」 右「左程迄に思ふ其方が義氣を愛

で疑念を晴らす其爲めに汝に見する物こそあり」ト佛壇を指し「コリヤ義助とやら彼の佛壇に飾りある白木の位牌の數五ツ其方篤と眼を注げて見やれ」 義「白木の位牌は分つて居り升夫が一体何うしました」 右「彼れなる位牌の第一は本藩無二の大忠臣第一番に主君を諫め切腹を申渡されたる國家老松ヶ枝頼母殿」 義「ム、そんなら噂に聞た松ヶ枝様の位牌でムり升るか」 右「其次ぎなるも同様に君に諫言奉りお手討となつたる傍用人市橋要人次なる三ツの位牌とても近習小姓の銘々にて皆主君を諫めしよりお手討と相成りて果敢なく果たる若年輩猶此上竹田左京殿を始めとして同じ事にて閉居なし謹慎する者數を知れず斯いふ右京も命を棄て御異見申上るは存じ居れど忠臣國に絶え果ては國家の爲めならねば時を計つて諫を入れ主君の迷ひを晴らさんものと惜からぬ生命を長存へしが過日端午の節句の砌り酒の余興に城下の町に火を放たん主君の結構余り暴悪見るに忍びず面を冒して諫言なせしに依り其座に於て閉門申附られ夫より後は替居の身の上今は百方思案なすとも諫めを入るゝ道絶たれど尙しも此右京が頼みと思ふは我君の妹君照姫様と申するは女儀でこそあれ天晴の賢才兄君の御亂行とお家の安危に心を痛め只管現世を果敢なく念ひ在家の僧の御身持浩る次第にあるなれば諫むる者のなきにはあらず主君の諫めを容れ給ひぬのみ頼もしげなき世に生存へ國家を愁ふる右京の心中コリヤ義助とやら察してくりやれ」

「へいへい」恐れ入りましてムリ升る、然ういふあなたの御心中とは聊存じませす無禮
 過言の段々お許しなされて下されませ併し今日腹立まされ是へ飛むで参つたお影で様子が
 がらりと分りました、土ほせりの私風情のやう者で何の役にも立ますまいがお國のお爲
 かお家の大事と申そう時力業なら一人前は働らさず何時なりとも御用を仰せ附けられて
 下さりませ」
 右「神妙なる其言葉拙者心得あれば時折之内々にて余が屋敷へ訪ふてくり
 やれ」
 左「有難う存じまする夫では私は是にてお暇をねがひ升唯今の私の粗鹿御免な
 れて下さりませ」ト悄然として義助向ふへ這入る右京跡を目送り思入あつて」
 右「集は
 下賤の身なれども國の爲には命をも惜まぬといふ今の言葉右京殆んど」ト感心のこなしめ
 るのが道具替りの知らせ」感心の致したわい、ト合方時計の音にて此仕組よろしく此道具
 ぶん廻す。

○本舞臺通りの二重、上手一間雲母形張の壁、此次ぎ一間の床の間是に佛語の大軸を掛け
 此下手唐書山水の金襴、大欄間をわろし、都て天眼寺客間の体、二重中央に照姫々の拵ら
 へにて前に經机を置き讀經して居る、左右に以前の腰元四人居列び居る、此見得よろしく
 音楽入りの合方にて道具納まる」ト合方に成り奥より熊澤丹下若さ家老職の拵らへにて出
 て来り二重に住ひこなしあつて」
 丹下「コレハ」姫君様には當日と兄君様の御代参の

義恐れながら御心勞の程御推察の仕つてムリ升る」
 照「其方逆も終日の役目無大義であ
 ろうのウ」
 丹「ハ、御懇のお詞有難う存じ升る、イヤナニ女中方姫君様に密々に願ひた
 き義のムれば御身達には暫時遠慮を」
 腰元「畏まりましてムリ升る」ト腰元と奥へ這入
 る丹下は懐中より紫の服紗包みの短冊を出して」
 丹「姫君の御經讀誦の妨げは恐れ入り
 ましてムリ升るが拙なき腰折御添削が願ひし存じ升る」ト是にて照姫短冊を手に取りあ
 げ」
 照「行きやらぬ夢路に迷ふ袂には天津空なき露ぞおさける、丹下コリヤ戀歌でとな
 いか」
 丹「いかにも戀歌にムリ升る」
 照「此戀歌を妾に添削せよと言ふの何ぞ心の
 あつての事か」
 丹「いかにも御意の通りにムリ升る」
 照「シテ亦何等の故あつて」
 丹「ハッ右の戀歌の添削をねがひ升る拙者が存念姫君様お聞下さりませう、我君秋政公
 の御乱行は知ろし召るゝ通りにて此分にて相過なば何れとも大公儀の上聞に達するは是治
 定然すれば重きお咎めのあるは是以て當然なり然もなき間に我君へ御隱居を勧め奉らん拙
 者か心体、斯様な義を姫君へ申上ると恐れ入り升れども斯く申す拙者めと御縁を結び給は
 らば老中方へ取り入つて御家督の義之如何様とも相成る事斯様申さば主従の禮を失ふやう
 なれども是もつて某が決して私慾に爲すことならず唯々お家の行末を思ふが故の此はか
 らひお心に相適ふか適わざるかと存せぬが姫君様御賢慮の程願わしう存じ升る」
 照「コ

リヤ其方が心に靡けといやるのか」丹「夫もお家のお爲めにムれば」照「アイヤ丹下左程家の爲を思ひなば何故諫めを入れざるぞ兄君の御所行正しからざるも原とといへば皆其方が勸なるぞ」丹「エ、照「知るまいと思ひ居るか原其方は何者なりしぞ亡き父上の小姓なりしが御最厚きお取立にて日に増し月に立身なし兄君の御代となりてより老臣の席を汚すも父君の餘光といひ兄秋政君の御恩ならずや其大恩を思ひなば君を諫めて臣たる道を盡すべきに然となくして己れの榮花を計らんと國家に害なす汝が心体やがて佛の道に入る妾に妻になれとは主従の禮を乱すのみならず家の爲には大悪人」丹「ヤア

照「見るも却々穢らわしい疾々」と此座を下りをらふぞ、ト屹度なつて短冊を引裂き捨る丹「スリヤ左程迄姫君には」照「ア、言ふな、ト起上り水晶の珠數にて丹下を擲のが道具替りの知らせ、不忠者のが、ト屹度なつて顔を背ける」此仕組時の太鼓にて此道具ぶん廻す

○本舞臺二はい目の道具に戻る、爰に以前の百姓民藏辻堂の椽に腰をかけ葺を喫み居る能き處に以前の垂簾置きあり、善太權六の兩人立懸り居る此見得禪の勤めにて道具とまる

權六「コレく善太汝も大概無理な理屈を云ふて置け今此人の言葉を聞けば乗つて居る客人が難義をして居るのを見兼て爰まで昇て來たと云ふではないか」善太「エ、放棄つて

をけ夫が餘計な世話といふものだ夫が己ア癪に障るのだ」照「分らねへ事を吐しやアがるせモシくお前も腹が立たであらうが料簡してやつて下せい全体此野良の酒に喰ひ酔て居やアがるからだ、サア善太是から約束の領分境まで遣つつけやう」善「そいつは眞平だ此方は是からが肝腎の用向だ」權「夫じや乃公一人困らせるといふものだ何でも貴様が行にやア成ねへ」善「エ、仕方がない遣つつけろ」照「サアやつたりく、ト兩人駕をかきて橋懸りへへ入る民藏は跡を見送り」民藏「マツ是で厄介拂ひをしたといふものぢや、夫は然うと最前の片棒は何處へ飛むだかしらんモウ一度逢ひたいものぢやなア、ト是を在郷唄に成り向ふより以前の義助思案をしながら出て來るを民藏と見て」民「サ、お前は最前の相肩をのか大層慌て、ムつたが何處まで行ツしやつたのぢや」義助「イヤ私は不圖思ひ出した事があつて駈け出したが無跡でお前一人で難義をさツしやつた事であらう氣の毒を事をしたのウ」民「サア聞つしやれ今の先き駕屋がやつて來て漸々の事で客人を引渡しましたわい」善「然うでござんしたか、ト思入あつて辻堂の椽に腰を掛け是を蛙の合方に成り、斯うしてお前なり私なり見す識すの者あれども人の難義を他所に見捨ず橋子を擔ぐお前の心体尋常の人とは思えねば吾の心の裏も打明けて言ひ升るが實は最前飛出したのは駕にのせた老人に領主の惡口しられたのみか一藩の内にも人らしい者もないと言

われれたが痛に障り腹立まされに日比から忠臣と名の高い梅澤右京様の邸へ言ひ分に出掛たが先に段々様子を聞けば右京様と素より夫と一實に涙の溢れる程大勢の御苦勞其し頼みとおもふ梅澤様も日外城下へ放火の時遮ぎつて主君へ異見をさッしやたので夫が咎めて今は閉門」

民「エ、なんと言ッしやる忠臣と噂のある梅澤様も御贄居をなされて居ると言ッしやるのか」

義「モウ此上は御城内は主君を諫めるお人はあるまい是からは百姓なれども折を伺ひ主君を諫め民の苦思を救ふのみか三枝の家を全たふすると神に誓つて此儀をすッぱり覺悟を極めました」

民「チ、お前の性根で然う思わしやるのも尤も余も姑めて逢ふたれ前なれど見處のある人と思ふて居たのじや余も矢張御領内の智隈村の民藏といふ見る蔭もなき百姓なれども主君の我儘無道を物憂くおもふて居る處何をいふても百姓風情の此余がヤキモキいふても初まらぬと唯心で思ふばツかり最前の老人の客人が悪口と言ひお前の今の咄といひ彌々捨て置く時はお國の行末覺束をい假令數にならぬ小前の者でも同じお國の米喰ふ虫主君の外聞矢張り此方へかゝる外聞お國の耻辱之此の身の耻辱今より心を一致して假命令を捨るとも國の病ひを治さねば何ぼ百姓士民でも斯ういふ時に力を入るが國で産れた義務といふもの」

義「ヨ、好ういふて下さつたお前のいふ通り少とも違ひのない事ぢや你も徳岡村の義助といふ矢張同じ百姓ぢやが互ひに知す知らぬ同士が」

民「知ぬ旅人が乗たる垂駕」

義「一ト肩入れたが不思議な御縁」

民「是から心を一致して佐倉の宗五郎か但し亦た」

義「伏見の町の義民といふ文珠丸助が轡を追ひ」

民「互ひに太義を遂る爲め心を合す固めの誓約兄弟分の義を結ばん」

義「夫こそ吾も望む所そんなら茲で互ひの胸を」

民「わばいて固めの血盆」

民「一ツの茶碗を兩個に割て」

義「チ、幸こひ地蔵へ供えたる丁度二ツのアノ茶碗」

民「一ツの茶碗を兩個に割て」

義「是を速座の又物代り」

民「變せぬ誓ひの証人は」

義「衆生濟度の地藏尊」

民「石より堅い互ひの固め」

義「そんなら此場で」

兩人「チ、」

「ト茶碗を割り其碎片にて兩人腕より切り流るゝ血汐を受けて兩人互ひに飲む事あつて」

民「サア斯う義を結ひた上からは生死は互ひに一ツ所」

義「夫と固より互ひの決心、然しかう兄弟となる上と言ひをくとはお互ひに云てをかねば成ぬわけ少し未練のやうなれども吾には一人の妹があるが次第に依つてとお互ひに別々に死にも知す万一吾が御前より先へ死る事があつたらば妹の事を頼み升ぞへ」

民「夫は云ふ迄もないことぢや若も吾が先へ死むたら少し汝より重荷ぢやが盲目の母に 慧の親仁さん此事をたのみ升そや」

義「ソリヤ兄弟なれば互ひの事」

民「ヤレ、是ですッぱりぞ」

義「日本晴が」

兩人「したやうぢやわい、ト此時民藏先に善太が落したる手紙に目をつけ拾ひ上げ」

民「何じや、土鼠のの善太へ六印より、ト讀む

事係つて何心なき体にて披きみて、ヤア此手紙の文言では御領主の姫君照姫様とば今日天
 眼寺御佛参の折を伺ひ豫て喋し合せし通り火を放して焼き殺せとある頼みの密書、ト義助
 は愕然し手紙を把て操り返し讀む事あつて」 義「實にコリヤコレ姫君様のお身に取ての
 一大事最前梅澤様のお言葉にも今お詰に姫君なくば愈々お國々暗夜も同前と仰しやつたコ
 リヤ打捨てて置れぬわい、」ト此間民藏向ふを屹度て見て」 民「ヤ、左様いふ間に天眼寺
 の方にあたつて俄に火の手の上りしは密書の校計に相違ないわい」 義「飯合火の中水の
 中でも生命に代て姫君様を助け出さいで置べきか民藏後事を頼むだぞよ、」ト一散に向ふへ
 走りこ入る民藏跡にこなしあつて」 民「次第に勢ひ滅んの火の手義助一人じや命も危う
 し我とても忠義に異らぬ俱に一臂の力を竭し姫君様をお助け申さん、」ト行かゝる此時上手
 よりおかね百姓女房の拵らへにて走り出て来り」 おかね「チ、民藏さん爰にムんしたか今
 お前の處のおみつさんが虫氣が附た故迎ひに氣ましたのじや早う戻つて来て下さんせ」
 義「何じや女房に氣がついたぞか」 おかね「夫ぢやに依て呼びに来たのぢや妾と一緒に戻つ
 て下され」 民「エ、今歸去ことは出来ぬわい」 おかね「夫でも戻らにや内で困るわいな
 ア、」ト民藏の手を引張る」 民「其處どころでは、」トおかねを突刺して、ないわいやい」
 ト早き合方にて向ふへ走り這入るおかねは腰の痛むこなし此見得よろしく此道具ふん廻す

○本舞臺常足の二重砂利地カスリの蹴込、向ふ切出の山亦山、上手松の立樹此傍に平舞臺
 へ掛出しに藁菅の船取小家、下手芦原、空より松の釣枝、平舞臺中央に乗捨の船釣船一艘
 棹にてもやいてある事、此船の内に照姫亂髪振袖所々焼け破れたる拵らへにて氣絶して居
 る、是を以前の義助五体焼け爛れたる大わらわの拵らへにて介抱し居るすべて天眼寺裏手
 狭草川水枯の模様、「風の音烈しく」セイ山鳴の鳴物にて道具納まる」 義助「姫様への
 ウーお氣を儘かにおもちあされませ、エ、川中でありながら一滴の水さへもなき此水枯、
 姫君様ヤア、イお姫様イノ、ト呼び活る是にて姫は心附し様子にて」 照姫「ア、苦しや
 くのウ」 義「御道理でムり升る何うで苦しうもムりませうがお氣を丈夫におもちなさ
 れて下さりませ」 照「此身一ツを免るゝ事の叶わずして正しく火煙の其裏にて息絶しと
 思ひまが扱こそなたが自を」 義「サアお聞なされて下さりませ私事と御領分徳岡村の
 百姓にて其名を義助と申升るものお姫様の危急をば何卒お助け申さんと焚盛つたる火の中
 へ無二無三に駆入てあなた様を引抱へ出やうとすれと表の方へ爾、火勢烈しく却々出る
 ことならぬ故裏手の塀を打碎き山傳いに此狭草川へお連申れ申たおれと折の悪い水枯にて
 向ふの岸へも越こと叶はず尙しも茲に一艘の乗船のあつたを幸ひ此船へ入れ申し御介抱は
 致しましたが御覽の如く惣身大概焼け爛れ自由の働らさ成ぬとはア、困つた事でムり升わ

い「ト照姫は頼母しと思入あつて」 照「チ、頼母しは汝の親切忘れと置の嬉しそや」ト
 泪に嗟び悦びつ思入れ此時山鳴震動の鳴物烈しく成る義助さつと成り」 兼「ヤ、此狭章
 川の水にわたつて数千の猛獸一時に吼るが如く鳴動するは扱は此程より瞬に這わぬコリ
 ヤ山津浪と覺えたり」 照「ヤ、そんなら俄の山津浪とな」ト此時鳴物次第にこげしく鳴
 る」 兼「モウ此上は天道任せ腕を限り」ト棹を取のか知らせにて淺黄幕を冠せ津浪の
 鳴物にて聯ぎ後ろの道具出來次第知せにつき切つ落す

○本舞臺半舞臺、舞臺前浪手摺、是より向ふを高く舞臺一面浪布を張りつめ、正田山々へ
 山津浪のあふれし暗がりの書割、舞臺真中に大岩、上下岩山の出かけ、すべて狭章川津浪
 洪水の体、是より床の上るりに成る」 上るう「時世あれ愛に三枝の領主といつば北陸道
 の大守にして一國一城の主と暴惡飽まで増長し其國穩やかならざりける時に佞人讒者の輩
 其虚を伺ひ照姫を亡わんず奸策より大河と噂高浪の狭章川の上流堰留て一時に落す水勢に
 連れて溢る、山津浪枯たる水も一時に山なす大浪押寄て人家田畑も押流し實に浪打上げし
 打下し」ト是より早笛テンテツクの鳴物大荒大雷の音にて淺黄幕切て落す」 上るう「
 次第なり河水増て陸共に一時にあふる、潮水の時しも一天黒雲覆ひ暴風樹木の梢を鳴し雨
 と車軸の如くにて雷光稲妻はた、神世界も頽れん其有様荒に荒たる鏡どき浪を押切る船は

水底へ入るよと見れば浮き上り逆まく浪にクルクル義助も今は一生懸命惣身の痛みも
 打忘れ逆まく浪に棹さして死者狂ひの働らきは他にたぐひも嵐吹く荒たる中を根限り腕に
 委せて押來り」ト此上るりにて向ふより以前の船に照姫義助兩人乗りて浮きつ沈みつする
 事あつて本舞臺へ來る」 上るう「又も押來る山津浪烈しき風浪に巻込れ船は漂よふ計りな
 り忠義と義氣に精神は鬼神も挫ぐ徳岡の義助も今は一心に神に祈誓をかけまくも嵐の爲に
 船体は岩に突當破損なし水におぼる、其暇にも姫を小腕に引か、へ浪にひかされ暫らくは
 姿形も見えざりける」ト此上るりの内義助姫を抱へて泳ぐこなし始終浪の音とげしくト
 い兩人の姿は下手浪の間へ沈む」 上るう「水に哀れや兩人は底の藻屑と鳴浪の向も烈しく
 嵐につれ押戻したる風浪とも浮き上つたる義助の姿姫を放さじ殺さじと抱さしまゝ立泳ぎ
 する其機會思わす取附く岩角に」ト此上るりの間に岩角に吹き上げられる是にて義助は姫
 を岩の上に助け上げ其身も岩角に取りつきホッと思入苦しきこなしあつて」 兼「一度び
 火焰の中をまぬがれ命から」姫君を助けし所へ亦もや俄然に山津浪現世からなる水火の
 責苦茲で命も終るも何卒姫の今一度び御心の附かる、やうモウ此上は神慮の擁護、ト
 肌守りより白山權現の守札を出し御符を姫に含ませる事あつて、當國の鎮守南無白山權現
 姫君の御生命助たまへ何卒蘇生なさしめ給へ、ト祈る事あつて、姫君様いのウ」ト

呼び活る是にて照姫心附さし思入あつて眼をひらく義助嬉しき思入にて」義「しめた」ト喜こふ拍子に倒かゝるを踏みとまるが木の頭 上るう「たぐいあらしの忠義心勇み勇まし」ト義助は姫を呼び活る」此模様宜しく矢張大荒の鳴物浪の音烈く床の三重を冠せ〇拍子幕

三幕目 三枝家長局の場

同奥殿捕物の場

清涼殿吟味の場

役人替名

一竹田左京	一陶兵馬
一熊澤丹下	二渡邊金兵衛
一宮津六郎治	一戸田權兵衛
一竹田左右三郎	一瀧馬要平
一娘玉里	一中老静江
一奥女中菊藻	一近習二人
一同高浦	一足輕三人
一同歌浦	一仲間三人

一一同 琴 柱 一捕手 大せい

〇本舞臺平舞臺、上手折廻りの家体、前側障子を建切り此横面杉戸、正面下手の折廻りとも残らず杉戸、此前所々に鉄網三ツ足の廊下行燈を点しあり、すべて三枝家長局の模様、爰に前幕の奥女中四人雪洞を持ち立懸り居る、此見得合方時計の音にて幕明く」 菊藻「モウシ皆さん冬と違ふて是からはお夜詰の方が涼しうて遙か優ではムんせぬかいなア」

昔通ソリヤ其方が好けれども何じや、ら此頃では御殿の内は夜に入ると淋しい事ではムんせぬかいなア」 歌通「さいなア此間からの取沙汰にはヤレ奥庭へ夜が更ると男と女の姿が顯わるの時折は御殿の天井で恐ろしい笑ひ聲がするのど色々を噂聞くと首筋からゾクゾクして氣味が悪ふ思われるわいなア」 琴柱「サア其幽霊は男と女聞けば兩個寄合て泣くどいなア」 菊「大かた是は天眼寺で焼けた死なれたお姫様とお姫様を助けに這入た男の幽霊に違ひムんすまい」 其「併し話しの幽霊よりお局様の小言も怪げれば」 歌「皆さん行うじやムんせぬか」 四人「サアムんせいなア」ト合方に成り橋懸りへは入る、此時上手の障子を明け静江片外し中老の拵らへにて腰元の跡を見送りながら前へ出て」 静江「最前より御廊下にて女中途が姦ましい世間話しの様子を聞ば案に違わぬ姫君様の横死の取沙汰」ト愁ひの思入あつて「妾は賤しい商人の家に生れ何一ッ人に勝れたることもなきに厚

き御恩を蒙りつて人も羨やむ中老の大役然るに日外天眼寺御佛参の其砌り法會の式や万端を長老の閑室にて問合せをなす折しも不意に燃え立る猛火の勢ひお救ひ申す術もなく可憐の姫若様を猛火の煙となしたるは返すべくも家來の身として此上もなき不忠の大罪其後も此身の不念を憚り部家に籠つて遠慮はずれど今女中達の話の通り眞個姫君様が夜々お姿を顯し給ふものなれば今宵は何卒お目見得して火災の折の我身の鹿略をお詫申上ねばならぬ、トハ言へども亡魂の再び現世へあらわるゝ謂れ逆もなければも若も尊態に違わすは唯一言のお説を申さん、然じや〜ト唄になり思入おつて上手へ這入る後知らせにつき此道具ふん廻す

○本舞臺上手寄に大高二重、本家根本椽附き、白木の手摺塗り骨障子、椽板を打ぬき床下より人の手這入る眺らへあり、二重の上手に切戸、床下は泉水の心にて敵を置き、下手細代塀正面に切戸口、下手に柴垣柳の大樹、いつもの所に枝折戸、舞臺夏草の畝、若樹の釣枝、釣枝の蔭に灯入りの月但し雲かゝりあり後に晴れる仕掛け、すべて三枝家奥庭の模様、此見得時の鐘蛙の合方にて道具納まるト鳴物打上げ眺らへの鶯吟に成り是へ薄下〜様の風音を冠せ舞臺前の下草へ差金の螢むらがり居る右の鶯吟にて以前の中老静江庭下駄にて忍び出て來り群居る螢を見て思入あつて

靜江 村雨も今は小やみて草の葉の露の

光か螢火は失せ給ひにし姫君の亡き魂現世に迷ひ玉ふ知らせにてと非ざるか豫て噂の男女の姿夜なく時刻を違へずしてお庭先へ顯わるゝとの事、少時小蔭に身を忍び事の實否を見定めん、然うじや〜ト柴垣の蔭へ小隠れするを矢張右の鶯吟にて橋懸りより前幕の玉里黒好み振袖衣裳にて後より左右三郎黒好みの着附け大小紺手拭にて頬冠をなし忍び〜に出て來る此時ドロ〜やうの風音にて螢一ト丸めに成りゲル〜と廻りて飛び去る、柴垣の蔭より静江半身を出して様子を伺ひ居る、玉里は螢の消えたる處まで行きてハア、と泣落すを左右三郎小聲にて

左右三郎 アコレ密かに〜ト制する是を蛙の聲靜かお合方に成り

玉里 是へ參る途中もおとなし申せし身の納まり此行末は父上初め此妾等も何うなる事かと思ひ弁ると悲しうて〜なりませぬわいなア

左サア其心細きは御身ばかりか某ども同じ事御身も我も父母の許し玉ひし中あれども未だ婚儀の式をわけねば其名のみなる妻良夫然れども縁と不思儀なものにて言合さねど日外より此奥庭へ二人とも夜なく互ひに忍び込むも當時主君の御側には熊澤丹下あんどいふ邪智倭好の者あつて淫酒を勧め放逸の御行状をつのらせ參らせ恰がら御殿と常關同前

玉里 殊に貴郎の父上初め妾の父も俱々に今之閉居の御身の上既に姫君さえ非業にお果なされし程ゆる此上惡人共の計らひにて主君を失ひ且と亦説を携えて父上に切腹及と斬罪などゝ重き所刑に行な

わんも計られねば斯くお居間近く夜毎に忍び悪人共の爲す業を探り聞ん互ひの心」 左
 然は言へ萬一人に覺られなば互ひの身の上又親々の身にも關はれば見咎めらぬやうする
 が肝腎」 玉「ソリヤ心得て居り升ぬいなア」ト大きくいふを」 左「アコレ」ト制して兩
 人忍び足にて柳の蔭に身を寄せる、靜江は此様子を見て思入あつて」 靜「闇に姿を見え
 ねども聲は聞知る梅澤の息女と竹田の子息と兩個倭臣輩の機密を探り君と親とを守護せん
 爲活る振舞なしつるは、テモ頼母しい事じやなア」ト感心のこなし兩人は此聲を聞き枝折
 の傍へ来て」 左「然ういふ聲は中老の」 玉「靜江様ではムリませぬか」 靜「まこと
 に兩個と左右三郎殿に玉里殿にてあつたるか」 左「あなた様には何うして」 二人此
 所へ」 靜「妾の是へ参りしは夜なく男女二人の亡靈お庭先へ頭わるゝといふ御殿の取
 沙汰其信偽を見届けんと参つて見れと亡き魂ならでお兩人様、シテく是迄心を合せてお
 二人共に」 左「アイヤ言合せしには非ねども父が安否と我君を密かに守護せん忠孝の心
 に計らず落合ふ奥庭」 靜「併し今は知らるゝ如く倭臣日夜にはびければ庭の小陰といひ
 ながら油断とやらす必らず共にお心をば」 兩人「ハア心得て居り升る」ト此時下手より
 釋鉢巻股立の捕方四人伺ひ出て来る」 靜「ハテ心得ず今迄彼れなる泉水に蛙の聲の森ま
 しかりしに一時に聲を止めしは」ト思入此時捕方四人前へ出て」 捕方「扱こそ變化め」

四人「覺悟なせ」ト一時に左右三郎玉里に打てかゝる是を一挺入りの合方に成り兩人捕手
 を相手に立廻る、此間靜江と懐劍の目釘を濕して身構へする、ト捕手と叶わずして懸懸
 りへ逃て這入る是にて兩人ホッと思入、此機會に床下より椽側を取外し竹田左京紺看板仲
 間の拵らへにてツカくと出て來り無言にて左右三郎を木刀にて打据る是に驚きひるむ處
 を玉里を捕て押へるを左右三郎左京に組附く、是にて玉里を捨て振りほどき立廻りに成り
 靜江は此時堪り兼たるこなしにてツカくと前へ出る此時柴垣より前幕の宮津六郎治袴股
 立の拵へにて忍び出て來り靜江を引戻し一寸立廻る、左右三郎玉里は左京に組敷れ身動き
 のおらぬこなし靜江は六郎治に組敷れて双方一時に用意の早繩にて縛しめる、此時月の雲
 晴れ皆々顔を見合せ喫驚して」 六郎治「ヤア狐狸妖怪と思ひの外汝れは中老靜江だか」
 靜「然ういふあなたは六郎治殿」 左京「ヤア曲者と思ひし汝は左右三郎」 左「實に
 あなたは父上様」 左京「今一人は梅澤の御息女」 六「實にこなたは玉里殿」 玉「左
 京様でムリましたかいなア」 左京「血で血を洗ふ捕人と」 六「囚人」 五人「是はし
 たり」ト五人顔見合せ呆れしこなし」 六「然は然りながら御寮所近く忍び來りしこ一ト
 方ならぬ大事の科人」 左京「假令親子縁者たりと上上の拵に用捨があろうや謹慎中の左
 京なれども捕へし二人は御前へ曳き拵に任せて刑する心得」 六「コリヤ然うなけりやヤ

かなわぬこと中老とても其通り」 三人「三人は」 六「いかにも吟味を遂げ申すは」ト此時月に雲かゝる」 盤「空は又もや曇れども」 左京「曇りなき身は何時か又」 玉「晴行く月の露の身は」 左京「干さぬ袂の濡衣に親子一ツでないといふ身の潔白を立ぬく左京」 左「スリヤ父上が」 左京「ナ、武士の性根は」ト傍へ寄りとする左右三郎を突やるのが道具替りの知らせ」 爰「じやわい」ト屹度なつて立上る静江と夫は余りといふ心にてチゴつくを六郎治手荒く下に据る、玉里とハア、と泣き落す此模様宜敷く寺鐘早めの合方にて此道具ふん廻す

○本舞臺常足の二重本椽附、正面黒塗かまらの上段の間此上下三蓋松の杖散しの金襴、此真中一面の御簾を下しあり 上手のつま塗骨障子、下手落間後へ寄せて竹扱みの板塀走に潜りの切戸あり此前紅葉の大樹、空より同玄く釣枝、橋懸り庭口の切戸の出這入り、すべて三枝家清涼殿奥庭の模様、二重に銀燭を点し、茲に前幕の四人の諸士立懸り居る、此見得早舞にて道具納まる」 兵馬「何と怪しからぬ珍事ではムらぬか」 金「御寢所間近く曲者が」 盤「我君を弑せんどの工みにて」 要「忍び入りしと申事」 兵「万一取り逃して之一大事」 金「我々共も其場に馳せつけ」 要「取圍むこそ肝要ならん」 盤「何れもお越しなされい」ト行かゝる此時奥にて」 丹下「夜陰と申し立騒いでは君への不禮、マツ

く控えてムれ」ト調べ合方に成り上手の奥より熊澤丹下服部宮内麻上下一本差にて出て来り」 宮内「各々方今宵は奥庭にて捕へし曲者此席に於て吟味なし御簾の内にて我君にも御聞取りに相成るとの仰せなれば鹿忽なさやう心得て能くムれ」 四人「委細承知仕つてムり升る」 丹下「イヤナニ服部氏今宵君の御寢所近く忍び寄たる曲者こそ一人と梅澤の娘玉里今一人と竹田の悴左右三郎拙者思案をめぐらすに彼等二人と親々が豫て許せし許嫁とか承はる左すれば互ひに婚姻の式を待兼夜毎く奥庭にて草を敷寝の假り枕不義淫猥を働らき居りしものと認め申たが何と左様な義ではムらぬか」 宮内「イヤ熊澤氏拙者が案する處にては彼等兩人何れの親も今は閉門塾居の身の上夫故晝は遠慮なし夜陰にお庭へ忍びしは君を守護なす宿直の老臣にでも出會ひなば親の御不興免さるゝやう歎願でござんどの心より御寢所近く身を寄せて控を破りしものならん」 丹下「イヤく夫は貴殿の最自口と申もの渠等若し不義に非ずんば拙者思ひ當る事こそあれ梅澤竹田の兩人君の御不興蒙りて閉門申附けられたるを意根に思ひ我君を恨み奉り悴と娘に扮附て大膽にも我君を弑し奉らんとせしに相違はムらぬ、何故と仰しやれ其時其場に閑居の身の竹田左京が姿を替へ附添ひ居つたが何より証據又其手引をなしたるゝ不届者の中老静江此上は互ひに彼是と申そムより中老静江を呼び出し召挿たる六郎治に事の仔細を尋ね問は事明白に相分る

事何と左様ではムらぬか「ト此時奥にて」

○「御出席」ト呼ぶ是にて一同平伏する事あつて

「君御出座ある上は中老静江を呼出し糺明せん」

丹「ソレ兵馬殿呼び出し召れ

い」

兵「ハッ」ト下手に向ひ「中老静江急いで是へ」

六郎迫「ハア、」ト橋懸りより静江

繩にかかり仲間一人繩を取り六郎治附添出て来り静江を引据る」

宮「コリヤ静江日比に

似合ぬ今宵の所行何と思ふて右三人の者を手曳致せしものあるか又其身に覚えがなれば無

き様に明白に申たがよい」ト言へども首を俛て居る丹下屹度成り」

丹「コリヤ」

何故以て返答致さぬ覚えある故申譯がないのか」

六郎迫「サア丹下様がた尋ささるゝ奥庭

へ忍びし次第在体に申上い」

静江「ハッ夜陰に出入りを禁じたるお庭先へ忍び入りしは

別の義でもムりませぬ御寮所近き奥庭へ夜な」

怪しき幽霊の時を違へず顯わると承は

り人の噂の眞偽の程を見定めんと奥庭へ身を忍び六郎治様に見咎められて此仕合せ又三人

の人々を手引なせし杯と申事露聊か身に覚えはムりませぬ斯く申す妾が御疑念にムり升れ

ば彼の三人をお呼び出し遊ばしまして詳ましく御詮議遊ばせば事明白にムりませう」ト此時

御簾の内にて手を鳴す丹下はハア」

と御簾の側に行きて何か聞取るこなしあつて」

丹「唯今御前の仰せにて急ぎ三人の者を召出し詮議致せとあるね詞、ソレ三人の者を少し

も早く此席へ」

○心得申た「ト下手に向ひ」竹田左京父子の者梅澤の娘玉里急いで是へ

出て来る、丹下は前へ出て」

丹「コリヤ左右三郎」

左「ハッ」

丹「梅澤の娘玉里

己の過ちを顧みず却つて我君に意恨を抱き人知れず殺し奉れと差圖なしたるものならんサ

ア眞直に白狀致せ」ト此時左京前へ出て」

左京「アイヤ丹下殿以ての外の其お言葉拙者聞

門仰せ付けられし以來情々と考がふるに君の意に反かぬことを忠義ともいふべきに我は然は

なく君に逆らい御不興受けしは今更思へば不忠の到りと心附き何卒一ツの功を立て今迄の

不忠の御詫仕らんと日夜思慮を廻らす折柄夜な」

御殿のお庭へ怪しき姿をあらわすもの

ありと家中の取沙汰拙者思ふにコリヤコレ狐狸妖怪の所爲ならで全く野心を抱く者主君を

規ふに極まつたり萬一の事あつては國家の大事と相心得今宵御寮所の床下へ宵の程より忍

び居りしに果せるかな怪しの曲者宿直の若士と烈しき争ひなせし故採ること曲者ごさんなれ

ど其場へ飛び出て引捕へ縛しめみれば悴と玉里拙者篤と考がふるに未だ婚姻と致さねど兩

人之許嫁の事故に悴と梅澤左京を舅と心得玉里に語らわれて大膽にも君を規ひしに極まつ

此左京が腕ひだ眼に相違があらうやいかに内縁あればとて女房の親に抱き込まれたる大馬鹿者家中の見せしめ兩人とも所刑に行ふ待つて居れ「ト屹度いふ事あつて」イヤナニ丹下殿宮内殿唯今申せし如く全く是は玉里が分別に之あるまじ右京の内意を受けたる者に相違とムらぬ若し拙者に悪意のあるならば悴や嫁を捕へませうや恐れながら我君にも此義御賢慮の程願ひしふ存じ奉り升る」 宮「アイヤ竹田氏他より申之如何なれど御目鏡違ひかど存じ申す」 左京「ナニ拙者が目鏡違致せしと」 宮「サア實梅澤氏に右様の企てわれは何で若輩なる男女を以て何とて事を謀らんや諸流に達せし劔道者とか武藝に秀でし浪士をば相語らふとか刺客の手段も様々あらん何ぞ我娘や御身の悴左右三郎にかゝる一大事を任そうや左様な愚かしき梅澤氏とも存せぬゆる目鏡違ひと申てムる」 左京「イヤ」決して左に非ず我悴を語りひしは深さ慮はかりのあつての事萬一事を仕損じて虜と相成る其時は悴を餌に此左京に罪を着せ其功に依て己れが身の罪科を免れん深さ敷計と素より見抜きし拙者が眼力必らず助言を控へ下され」 宮「イヤ夫と其許が不理屈と申もの」 左京「ナニ不理屈を申そふや悴を庇護が親子の愛情其肉身の悴をば止むを得ずして親の手より捕縛なして差出すも主君を大切か國の爲めを思ふ左京が誠實夫でも拙者が非でムるか」 宮「じやと申して二人の者が」 左京「罪なき者を親の身で無實の罪に落さんや主君に

仇なす悪人を貴殿に御負めさるゝか」 宮「全く以て左様で」 左京「左様でなくハ服部氏忠義の妨げお控へ下され」ト此時上下の近習一人上手の障子の内より出て來り」 近習「竹田左京様へ申上る唯今我君仰せには我子の愛よ溺れざる忠義の程を御感あつて是迄の過ち御赦免仰せ附らるゝものとの御意にムり升る」 左京「スリヤ拙者が志を御賞美あつて唯今より御赦免下さるとな、ハ、ア有難う存じ奉り升る」 丹下「竹田氏が悔悟に引替へ憎むべきと梅澤右京」ト此時又上手より麻上下の士一人出て來り」 士「ハッ熊澤様へ申上る我君仰せ附られ升るにはト方ならぬ梅澤が大罪切腹申付けよとの嚴命にムり升る、又此御上使として竹田左京檢使添役として服部宮内どの仰せ附けにムり升る」 左京「スリヤ上使の役目を某に」 宮「まつた檢使添役として拙者めを」 左京「ハ、委細承知仕つてムり升る」 丹「併し切腹と御慈悲な事」 六「縛り首にもならうもの」 五「エ、そんなら父上」 左「右京様には」ト兩人顔見合せて泣き沈む」 士「まつた左右三郎玉里の兩人は宮津六郎治に相預け中老靜江に服部宮内に預ける間取述さぬやう守護したせとの仰せにムり升る」ト士ノ奥へ這入る」 靜「いかある御所置に逢ふか知らねど宮内様へお預けどは不幸の内の尙仕合」 六「今宵の拙者の手柄をば君にも御賞美ありしと見え二人の者を拙者へお預けあるとは御奉公は勵まねば成らぬわい」 丹「夫も

君の御目鏡なれば油断のなきやう守護召れい」 六「心得ましてムリ升る」 左京「今日君の仰せにて赦免を蒙むる上から忍び姿の下郎の扮装も明日は以前に返り新参麻上下の折目も高く御前へ出仕仕れば各々方にも異變なきやう」 丹「斯く所儀の相附く上は罪人何れも引立召れい」 六「ソレ者共」 足輕「ハ、お引さされい」ト双方より十手を振上る三人是非なき思入あつて」 左「エ、恨めしい父上様」ト左京「成り」 左京「エ、未練な縁言」ト持たる木刀にて脊中を打つ左右三郎「ハア」と俯向く玉里はモシと取り附くを又打つ事あつて木刀を下に置くが木の頭」御苦勞ながらお引下され」ト丹下六郎治と好い氣味といふこなし、左右三郎玉里は泣入る宮内は腕を父ぬき思案のこなし足輕は三人を引立る」双方引張りよろしく三重模様の場合時の太鼓烏笛にて宜敷拍子幕

四幕目 梅澤右京切腹の場
土芥山蘇生の場

役人替名
 一竹 田 左 京 一竹 田 左右三郎
 一妻 小 枝 一腰 元 お 國
 一娘 玉 里 一同 お 光

一部 部 平 助 一服 部 宮 内
 一仲 間 文 吉 一梅 澤 右 京
 一同 伊 太 郎 一門 番
 一同 熊 入 一仲 間 四 人
 一玄 關 番 市 兵 衛 一小 者 貳 人

○本ふたい三間常足の二重敷臺附の玄關、見附大形の襖、前側さん戸、上下後へ寄て筋堀松の釣枝、總て梅澤右京屋敷の体、茲に市兵衛小倉袴老けたる玄關番の拵らへにて敷臺に腰をかけて居るお國光腰元の拵らへにて立懸り居る此見得唄調べにて幕明く」 お國「これとしたり市兵衛さん女子の私しらすへお主様のお身を案じ申ておればこそなアお光さん」 お光「然うでムんすわいな斯うしてお千度を踏むで居るものを御譜代の家來でありながら草臥たでと濟ぬわいなア」 市兵衛「何ぼう千度を踏ばとてお嬢様が歸らしやるといふでこなし己りや辛度うて」ならぬわい」 國「たんと其様な事を言しやんせお主人へ告げて肯くことではないぞへ」 市「サア」何ぼうかと告るがよい」ト此時奥より前幕の小枝着流しの拵らへにて出て來り」 小枝「騒がしい静かにしやいのウ」 市「然ういふおなたは」 三人「突様でムリ升るか」 小「我夫の御遠慮中に聲高に語申すはお上へ

對し憚かりありチトたしなむがよいサアお前達は早う奥へ往たがよいわいのウ」
 左様なれば奥様」 二人「御免おそばしませ」ト腰元兩人は奥へ這入る」
 小「ほんに下々といふもの口さがないものではあるわいのウ、夫にしても心掛りは娘の身の上昨夕何處へ行さしやら今朝になつても戻らぬと忍び男でもあつての事か然もあらば親々が許嫁せし竹田様へ言譯立すア、娘の安否が何うぞ早う聞たいものじやなア」ト是をバタ／＼に成り向ふより前幕の平助下部の拵らへにて足早に出て來り」
 平助「奥様茲に在でムり升るが一大事でムり升る」 小「ナニ一大事と心許ない何うした譯じやぞいのウ」 平「然ればお聞下さりませお嬢様のお行衛尋ね所々方々駆け廻つて戻り道様子を聞けば夜前竹田の若旦那左右三郎様とお嬢様とお奥お庭にて拵め捕られ詮義の末御不審が旦那様のお身に係り唯今是へ御上使がお入りになると家中の噂」 小「ナニスリヤ娘と左右三郎殿がお館の庭中にて拵め捕れしとソリヤマア何で何ういふ譯で、コリヤ打捨ては惜れぬわい」ト是をバタ／＼に成り向ふより門番一人走り出て來り」
 〇「ハア、申上り升唯今御上使として竹田左京様服部宮内様お越にムり升る」ト言ひ捨ては入る」 小「何の仔細か知らねども夫に此由申上げ品に寄らば上使とて用捨はならぬ」 平「何にしても御主人のお身にかゝりしと思へば心にかゝる上使の御入來失禮ながら下郎めもお次に於て上使の容子を」 小平助

免す」 平「イザ奥様」 小「スリヤ斯うしては」ト起上るが道具替りの知らせ居られぬ

わいのウ」ト兩人向ふへ思入」此もやう宜敷く合方に此道具ふん廻す

〇本ふたい一面に金地に梅の模様のある襖、戸家口橋懸りとも杉戸の見切り、舞臺花道とも薄縁を敷き詰め、すべて梅澤屋敷廣間の体、時計の音にて道具納まる、ト向ふにて」

〇御上使のお入り」ト是にて竹田左京服部宮内着附上下にて懷中に御書を入れ出て來り花道にて」 左京「我君よりの上使あるに出迎ひなさは上みへ對して無禮であらう」

宮内「イヤ左京殿強ちにれ咎めなざるな貴殿にせよ拙者にせよ言は親類同様の問柄定めて昨夜の様子を聞き混雜致す義もムらう」 左京「イヤ貴殿も用捨なさはせられよ我々に於てと役目の表上みへ對して相濟み申さぬ」ト此時奥にて」 小「アイヤ御上使様のお出迎ひ唯今それへ」ト小枝襦袢衣形りにて出て來り」御上使にはイザマツ是へお通り遊ばされませ

ム」 左京「アイヤ小枝どの上使といへば主君の名代疾にも出迎ひなすべさに左もなく一言不禮も説す是へ通れで相濟ふか」 小「是は亦左京様には異なる事のお咎めあなたが今日お越にならふと夢にも存せぬ上使のお役目」 左京「ソリヤ夫故の無禮でムるか」

小「マツ左様なものでムりませうか胸に問ふて御らうじませ」 左京「胸に問へとはソリヤ何を」 宮「アイヤ左京殿何分女義の事でムれば處忽の段はおゆるしあつて」 左京「

何を」 左京「

いかにも席へ通るでムらムイザ宮内どの」 宮「マツ」(ト是にて兩人本舞臺に來り高床几にかゝり宮内思入あつて) 宮「イヤ小枝殿定めて昨夜の義とお聞及びもムらムなれど右に就て主君より我々を越れしは近比以てお氣の毒なる息女のあやまり御心痛の程察し申す」 小「是こゝ御深切ある其お詞承はれば娘玉里夫にお越の左京殿の御子息左右三郎殿を語らひ殿様を害せんと計らせしもの之良夫の差圖と寐耳の疑ひと左京殿のさかしらなる由」 左「黙り召れ小枝殿此左京が讒言とは聞捨ならぬ其一言是には宮内殿もあり次ぎの間には梅澤右京を捕逃さぬやう手配りせし警固の武士も數多聞く其前ども憚らず女の過言何を以て讒言とは」 小「ハテ讒言でとムりますまいか夫右京は人もゆるせし當家の忠臣それなればこそ君を諫め御不興を蒙ひりしも忠義を存する故の事」 左京「イヤ言れまい眞實忠義を思ひなば善さも悪さも我君の御意に隨ふ筈なるに然はなく君の御所行を非となしての諫言が餘り過ぎたる夫故に閉門の咎り蒙ひりしが是第一に不忠の証據」 小「おつしやるな左京殿良夫諸共に君を諫めて昨今迄閉居のお身でありながら現在我子の左右三郎と並びに嫁の玉里を罪なくして繩にかけ良人右京を罪せられしは子にも愛をく朋友の信義も捨し人面獸心、良人右京に不審わりとは何を証據に仰せられしぞ御返答の次第に依りてと御上使なりとて用捨は致しませぬぞ」(ト懐劍に手をかけ乾度成る) 左京「アハ、

、、牝雞の晨するごと御自分如き」の何事によらず差出る事を申すもの右京殿の今の仕宜仮令實の我子にせよ私の愛に溺れ侍の大事を捨置んや」 小「其我君の大事とは良夫右京に工みありと仰せなさるか」 左「然ればこそ我君より差越れたる上使の某」 小「シテ御上意の趣は」 左京「女童に申べき次第に非ず上意は梅澤右京殿に面會の上述るであらう」 小「仮令女なればとて夫に懸る身の大事上意の趣き承らぬ其内は席と立さぬ左京殿御思案あつて返答めされ」 左「ヤア上使に對し返すぐも不禮な女モウ此上と」ト立懸るを宮内止て」 宮「アイヤ左京殿マツ猶隙と暮六ツ限りシテ右京殿には」(ト此時奥にて) 右京「アイヤ御上使の趣むき承はるに及ばず梅澤右京篤と承知仕る」(ト奥より右京水上下の拵らへにて出て來る小枝は見てビックリ爲し) 小「コリヤ我夫のお姿」 右「コリヤ」小枝何を見て周章る御上使の手前見苦しい」 小「デモあなたのお姿は若や上意の趣むきを」 左「流石と梅澤右京の未だ上意を聞ずして最期の用意は天晴れ健氣科は貴殿の推察通り慎んで承はられよ」(ト御書を出す) 右「俄かの上使御入來と斯あらんと存せしゆる御覽の通り最期の支度仕りし拙者にムれば上意の趣むき扱くるに及ばず右京請取の仕る」 小「そんなら君の御上意は」 左「其科輕からざるに付逆礫にも行ふべきを上み格別のお慈悲を以て切腹仰せつけられしは難有ふ心得られよ」 小「何

道れんと良夫を罪せし人非人」 平「サア其御立腹も御道理下郎とてもお主の恨み晴した
いは胸一杯然れども斯ては旦那様の覺えもない疑がひが眞個となつて御最期の後々迄も悪
名多ば悪人等の爲め流されんも口惜さのみならず囚のお身のお穢様にも科を重ぬる道理に
て却つて悪人の手立に陥入るやうなもの身に降りかゝる疑ひも晴る時節がムリませう其處
を思ふて御無念を何うぞ耐えて下さりませ」ト此時々計の音に成る」 平「アリヤモウ暮
六ツ」 小「正しく良人が最期の刻限」ト此時奥にて」 宮内「切腹確かに見届け申した」

小「コリヤモウ何うも」ト又立かゝるを」 平「モシ」ト止めて手を合すが道具替りの知
らせ」是でムリ升のい」ト拜む、小枝は口惜さこなし」此模様宜敷合方にて此道具ぶん廻す
○本ふたい平ふたい、後ろ黒幕、一面の薄原、所々に松の立樹同じく釣枝、馬頭觀世音の
建石無縁の石塔、後に黒幕切つて落せば向ふ山際迄薄原の夜の遠見、舞臺所々に馬の胴骨
すべて土芥山馬捨場の模様、半廻りより大雷、雨音電光にて道具納まる」ト橋懸りより赤
合羽の仲間二人六尺棒を持ち出て来る是と同時に上手より同じ拵らへの仲間二人出て来り
双方行き當り」 ○「アイター——氣をつけて歩行さやアがれ」 △誰だと思ふ飛ぶ鳥も
落る宮津六郎治様の御家來だ氣をつけて除けて通れ」 □「チ、然ういふ貴様は三六に五
郎助じやねへか」 ×「あんまりボン／＼ぬかすなへ」 ○「チ、手前達であつたのかチ

ツと氣をつけて歩いて眼から火が飛び出した」 △夫は然うと左右三郎と玉里の兩人をば
取逃してはお上みへ濟すと斯うして探しに出て来たが手前達の眼には懸らなんだか」
□「眼にかゝる位なら手めへ達に行當るものか」 ×「併し首尾よく捕へて戻つたら褒美
の金を遣らふと云ふた詞なれば然と道伴れ何でも氣をつけて捜せ／＼」 ○「女の足故遠
くは行くまら」 ×「夫でこ三六五郎助兄い」 □「ソレ又光つたぞ」 △「こいつは堪
らねへ」ト上下へ別れて這入る直に向ふより文吾提灯を持ち後より伊太郎熊八何れも仲間
の拵らへにて棺桶を荷ひ出て来り」 伊太郎「ヤイ／＼提灯持が先きに往つて何うするの
だ」 熊八「重荷をかついで居る者だ足許でも見せやアがれ」 文吾「何ばう重荷を擔げ
ばとて手めへ達に附合つて居られるものか己らア雷は下さらねへのだ」 伊「誰が雷を好
くものか」 熊「待と言つたら待つてくれ」ト本舞臺へ来る此時繩切れて棺桶を落す」
伊「ソレ見やアがれ手めへがチヨ／＼走りをしやアがるから到頭繩が切れて仕舞つた」
文「宜いや茲もモウ土芥山だ其儘に捨て行け」 熊「途方もねへ事をぬかすなへ是から
山際まで持て行くには一里足らずの薄原何處ぞ其處に繩はねへか提灯持の役目だ文吉捜し
てくれ」 文「馬鹿を言へ其んな物が落てあるものか不人情の様なれども己は茲で御免を
かふむり羽織だ」 熊「飛でもねへ事をぬかすなへ提灯持に逃られて堪るものか」 文

夫見ろ手前達でも宜い心持でこゝろめへがな御家老への奉公は手めへ達勝手にしろ、お先へ左様なら「ト文吉下手へ這入る」伊「ヤイ」先へ逃るといふがあるものかヤイ文吉侍ちやアがれ「ト跡を追ふて這入る」熊「ヤイ」己らア一人置いて何うしやアがるのだ死人と差向ひで立往生がなるものかヤイ「戻つてくれいヤイ」ト此時電光石火の音烈しくなる「ソレ又ゴロついて来やアがつた此奴はモウたまらぬ」ト下手へ逃げて這入ると跡直ぐにバダバダに成り向ふより左右三郎着附大小尻からけ頬冠りにて出て来る後より玉里手拭吹き流しに冠り出て来り」玉里「左右三郎様か」左右「玉里殿か」ト行かゝるを玉里とめて「玉」マア待て下さりませいなア」左右「去り逆は聞分なし親への孝を思わぬか」玉「夫じやといふて」左「ソレ」ト舞臺へ来る玉里追躰け来り左右三郎に取り附き「玉」マア待て下さりませ守り厳しき宮津の屋敷を黄昏の雨に乗じて這れ出で後を慕ふて来たものを貴郎一人死のウとはソリヤ餘まりお胸意でムリ升わいなア」左「サア其恨みも尤もなれど今左右三郎が言ふ事を玉里どの能う聞れよ、忠と孝との志しも仇となり捕へられたる其上には是迄忠義の父上の手の裏返せし非道の難題我等が爲めにいたわしや右京様には死と賜わり是なる馬捨場へ罪人同様捨られ土ひしと下郎共が先刻の話し原はといへば拙者より事起りし無實の罪何とておめく生き長存へ右京様に此身の詫がなるべきぞ

切て死骸のお側を去らず切腹なして申譯をする所存御身と母御の在ませば何國の里にも身を忍び母御へ孝行ニツには亡き父上の後世の間ひ吊らひが肝要なれば人目にかゝらぬ其間に早く此場を落られよ」玉「夫がつれない貴郎のお詞よしや此身に母ありとも囚の身を免れしからは所詮生きて母様にも御對面はかなぬ身の上殊に約束ある親々も警敵同士となつたるからと添ふに添れぬ女夫の縁仮令枕は交さずとも良人と思ふ貴郎と共に死ぬる此身の臨終の喜び何うぞお慈悲に左右三郎様共に殺して下さりませいなア」左「此上と如何せん左程迄に思ひ詰たる覺悟をれば」玉「一所に殺して下さり升るか」左「いかにも覺悟を俱にせん」玉「お嬉しうムリ升わいなア」ト四邊を見て」左「アレ見られよ玉里どの未だ新らしき棺桶の此馬捨場に棄あるこそ是ぞ梅澤右京殿の亡骸と覺えたり」玉「そんなら是が父上様か、ハア——」ト泣き落す」左「人の生死は果敢なきものと豫より知る亦れ也斯く淺間敷き御最期をお遂げなされし原はどいへば誰ゆゑぞ」玉「子故に無實の科を追ひ場所もあろうに罪人と同じ野末に尸を曝し」左「汚名を千歳に遺させましたも父左京が仕業と思へば」玉「恨めしながら此身が爲には勇御と思へば又も向られず」左「敵同士が今茲で覺悟を遂るもあなたへ言譯」玉「不孝の罪は父上様」左「御免なされて下さりませ」ト思入あつて」此上は人目にかゝらぬ其内に」右「南無阿彌陀佛

〔ト左右三郎は諸肌脱ぎ切腹仕様とする、玉里は懐剣にて咽を突かうとする此時棺桶の中にて〕

右京「ヤレ早まるな兩人待テ〔ト此聲を聞き玉里は恟くりして左右三郎に抱附く此時空より灯入りの月を下し後ろの黒幕切て落す左右三郎屹度成る是を詭らへの合方虫笛に成り〕

左「夕立の雲も忽ち晴渡り隈なき月に見渡せど人影とてもあらざるに待と止めし一ト聲は必定此野に棲ひなす狐狸妖怪の仕業ならん〔ト此時桶の内より右京水上下にて半身出し〕

右京「狐狸妖怪の類ひに非ず梅澤右京なるぞ」 左「扱こそ心の迷ひに附け込む變化の仕業、イデ正体を〔ト切てかゝる右京は身を外す是にて棺桶を切附る桶は仕掛にて碎けると右京ツカ〜と前へ出で切てかゝるを屹度止め〕

右京「其疑ひは道理なれども右京全く死せしに非ず心を静めて白刃を納めよ」 左「スリヤ御切腹と取沙汰せしと偽言にて」 玉「父上には御存命でムりましたかいなア」

右京「是には深き仔細のある事、竹田氏イザマツ茲へ〔ト此上手より左京野袴大小切緒の草鞋菅笠の拵らへにて出て來り〕

左京「事故奇く倭人等を計り謀せて右京殿無御本望でムらう」 左「ヤアあなたも」 玉「左京様でムりましたか」 左京「無や悴や玉里どのにも強面左京と思ひしならんが汝等故に讒死なすべき親と親とが虎穴をまぬがれ君家へ忠義を盡すべき命を全ふいたせしは禍ひ返つて今の幸ひ」

兩人「なんと仰しやる」 左京「此程仄かに承われれば館の

奥庭に夜な〜怪しき亡靈の顯わるゝどの家中の取沙汰は全く悪人等が事を設け我君を謀る工みに相違なしと篤と實否を糺せし上詮議致さば渠等が悪事もあらわれんと夜毎〜に

姿を窺し御寢所の床下に忍びで様子を伺ふ所料ら〜夜前眼にかゝりし故捕へてみれば我悴

左右三郎に玉里どのコハしなしたりと思ひしかど傍に宮津六郎治居合せしかば詮方なく思

案の胸を轉じ替へ右京殿の野心なりと罪に取て落せしと倭人原に油断させ忠義厚き宮内殿に事を打明け丹下が工みの裏を掻き悪人等を平けて主君を善良の君となさんと心を碎く竹

田左京必らず恨みと思ふなよ」 左「スリヤ梅澤氏を無實の罪に落されしも御思案あつての事でムりましたかいなア」

右京「讒者の爲めに死すべき命を全たふせしも左京殿の厚き情けといふもの、兩人の者に依て禍を免がれし右京が命と娘左右三郎殿の賜物と思へば

大事の我命」 左京「去りながら人目にかゝらば心盡しも水の泡貴殿は今より城下を離れ何地になりとも其身をば忍ばれよ我は猶も反問苦肉の手立を以て丹下等が深き工みの底を

探りて君の守護なすべし」 右京「さるにても左京どの拙者一ツのお願ひありお聞届け下さりませうや」

左京「コハ改まりし貴殿のお詞先祖よりして親族に等しき因みの梅澤竹田身に應たたる義にムれば御遠慮なく仰せ下され」 右京「別の義でもムらぬが御子息初め娘にも今之浮世を忍ぶ身あれば何れになりとも忍ばす心休夫につけても豫てよりた約束

を致せし縁談切て盃を致さずとも夫婦となして下さるまいか」 左京「夫は此方より望む所」 右京「スリヤお聞濟下さるとな、コリヤ娘今より許す夫婦中假令いかある山の奥野末に其身を忍ぶとも左右三郎殿を良夫と冊子懸て世に出る時節を待ちやれ」 左「お家の行末覺束なき時節をも顧りみず玉里殿を申受けなば忠義も忘たり身を忍ぶにも便り悪し何卒此義は國治まり民安堵の其上まで」 左京「白痴者め妻を娶らば主家へ盡す忠義が怠たるなんどいふ左様な狭き心体にて上の御用に立うと思ふか炭を呑み薪に伏すとも忍び難きを忍びてこそ人へ大事を爲すものなり唯夫婦心を一致し忠義の爲めに力を竭さばなごか妨げのあるべきや、但しの言葉を背くか」 左「全たく左様ではムりませぬぞ」 左京「妻を娶るは人倫の常道親にも安堵させてくりやれ」 左「此上は是非に及ばず父か仰せに隨がひまして」 右京「添ふてやつて下さるや」 左「いかにも御息女玉里どのの申し受るでムりませう」 右京「然りながら國安体の日にあらば吉日良辰をも卜せし上婚儀の式もあるべきが」 玉「夫婦固めは名ばかりにて取替すべき杯も」 左「夏野の原の草に置く露にわらぬぞ一身の」 玉「置き所さへなき今の有様」 右京「世の盛衰とは言ひながら竹田氏」 左京「梅澤氏」 右京「淺間敷さ身の」 兩人「成行じやなア」ト涙を押へる此時上手より宮内野袴大小の拵らへにて黒装束の從者二人乗物を昇り附添ひ出て來り

「 宮内」竹田氏仰せに隨ひ乗物をば」 左京「然いふ貴殿は」 二人「宮内殿」 右京「何かと貴所の」 宮「イヤ是皆左京殿の計らひ置れし路次の用心人目にかゝらぬ其間に此乗物にて彼の方まで」 左京「シテ左右三郎玉里殿の落附し處は」 宮「其義と氣遣ひ召るゝな中老靜江が頼みに依り宅は則ち城下の本町信濃屋清七方を使りて暫し其身を忍べられよ」 左「何から何まで御厚情あるお心添は」 玉「左様なれば父上様随分お身を大切に」 右京「随分共に心を附けて」 左京「宮内殿の差圖の方へ」 左「是より直に」 玉「参り升るでムりませう」ト兩人花道へ行くを 右京「ア、コリヤヤ待て」ト呼び止る兩人は花道にて下に居る」 左「何か御用が」 左玉「ムり升るか」 右京「返す」も夫婦中睦まじう」 左京「無事の便りを相待居るぞヨ」 左「其義と仰せ」 左玉「ムりませずとも」 左京「右京殿御覽下され親の怨目か存せねども似合ひ相應な夫婦ではムらぬか」 右京「夫も世が世の時でムらば」 左京「初孫の顔見る事も娛しみに致さうもの何につけても味なき世の中ではムらぬか」 左「夫も誰故」 二人「我君様の」 右京「コリヤ上を恨むな皆銘々の不運と諦らめ君への忠義を忘れるなよ」 宮「程は雲井に隔つとも」 在京「空行く月の」ト此時月に雲かゝる」 宮「幸ひ月も村雲に」 右京「聞さ互ひの身に取ては」 左京「白小袖で人目が氣遣ひ」 玉「聞にまぎれて」 左「そん

さら是より」 右京「乗物御免」〔ト右京は駕に乗る此時上下より以前の〇△の仲間二人伺
 がひ出て来り〕 〇△「何うやら怪しい」〔ト駕脇へ寄らうとするを〕 左京「不禮者め」〔
 ト仲間を突き廻して兩人の肩先に切付る是にて仲間は立身に苦しむ〕 左京「片時も早う
 〔ト花道へ行く事あつて兩人を見事切り返し白刃を持紙にて押へる右京と駕の内より戸を
 締切る左右三郎玉里と手拭を捌く是を一時の木の頭〕 右京「乗物遣れ」 従者「ハア、
 〔ト駕を昇り上る左右三郎玉里は手拭を冠り向ふへ這入る左京宮内は刀の血を拭ひながら
 跡を目送る〕 此模様よろしく早めたる合方にて〇拍子幕

五幕目 椎木村 銀杏茶屋の場

農夫 民藏 諫言の場

役人替名

- | | |
|-----------|------------|
| 一智 隈村 民藏 | 一作 男 耕 作 |
| 一竹 田 左京 | 一茶店 婆々 おとめ |
| 一梅 澤 右京 | 一陶 兵 馬 |
| 一信 濃 屋 清七 | 一戸 田 權 兵 衛 |
| 一三 枝 秋 政 | 一瀧 島 要 平 |

一熊 澤 丹 下

一作 男 作 兵 衛

一宮 津 六 郎 治

一千 魚 屋 市 藏

一酒 屋 善 兵 衛

供 廻 り 大 勢

〇本舞臺平ふたい、中央藁葺家根の在体の茶店、上手に土躰是に釜を掛け、駄菓子だ菓子の箱を
 列べ草鞋わらじなどを釣し、上手注進しゆじんを張りたる莫大なる銀杏の木此前に清水しみづの流、此後ろ在体
 青田あおたにの中遠見、總て街道茶店の模様、茲に干魚屋かまぼこやの市藏酒屋善兵衛腰をかけて居る茶店の
 婆々おとめ釜の下を焚て居る此見馬士まじ唄にて幕あく」 善兵衛「ヤレ」此熱いのに何處
 まで難義なんぎをさせる奴やつじやノウ魚屋さん」 市藏「イヤモウ眩くらくのも古めかしいが實に困つ
 た氣違きちがひひサ」 おとめ「れ二人さん何ぞ忘れ物でもさッしやつたのか」 善「イヤ然うでな
 けれど狭韋川さやがわの渡しが止つたので據よなく戻つて来たのじや」 「モシ渡しが止つたと
 は又去年のやうな山津浪やまづなみではムりませぬか」 市「イヤ」左様でない河原かはらまで往つた所
 領主りやうしゆの氣違きちがひひめが家中の大勢おほしを連れさらして狭韋川さやがわでの水馬みづうまの最中夫故往むねちゆう来止きよめになつて爰
 迄戻つて来たのぢやが忌いみしい業わざつくばりではないか」〔ト此時向ふより民藏たみざうを擔かかげ陸
 へ煙管えんくわんにて出る後より作兵衛さくべゑ耕作百姓かうさくひやくしやうの拵かまらへにて同じく鋤くわをかけた出で来り直ぐ本舞
 臺ほんぶたいに來り市藏いちざうを見て」 民「誰かと思へば村を廻る魚屋さん此暑このあついのに精せいが出来ますの

市「チ、智隈村の民蔵さん何うしてお前此邊をば」 民「サア聞て下さりませ去年の水難今年ことしの早はやで智隈杉田近邊は二年つゝいて作わざと皆無夫故此鋤屋新田へ近比雇よこせわれて来て居り升」 善「智隈邊のお方とあればお困りは知れてある事今歳の早と又あらひ事でムり升るな」 民「イヤモウ夫にお前さん去年喚うづめが子を生うままして産後の惱なやみの煩わづらひから乳さへ出ぬので困つて居り升」 作兵衛「ハア、そんなら此銀杏こいんぎやうの茶屋へ毎日来るのは隣の乳の出る願掛ねがひかけじやな、民蔵子といふものは可愛いものと見えるなア」 民「知れた事じや」

市「誰しも子の可愛いにと變からぬが親の慈悲じじ鳥獸ちゆうぶつにも劣つた奴やつと領主の主君しゆんしゆじや譬たとへて言いは已まれば親で領分りやうぶんに住すむ銘々めいめいと子も同前どうぜんのものじやのに慈悲じじといふ事辨わまへず子を誓ちかめて親が榮花はなに耽おぼるといふ法があるものか」 民「モシ、其様に言ッしやるな譬たとへにも云ふ泣く子と地頭ぢちゆう何をするのも上みへの奉公ほうこう誓ちかり毀こりの風聞ふうもんが他國たこくの人の耳みみに入り聞きけられでもする時は領主りやうしゆばかりか領分りやうぶんのお互たがひの身の外聞ぐわいもんにも關かわる事上じやうにも人の無なではあし現在いま目下いま竹田たけだ様や梅澤うめざわか閉門へいもんでムるのも下しもを憐あはれむぶ家の忠臣ちゆうしん御家老ごけらうがなくてはイヤ知らず聽きて御政事ごせいじの改革かいかくをして下さるに違ちがひなければ人ひとと知らず此民蔵このたみくらは夫を待つて居るのじや」 耕こ作さく「ところが其評判そのへやうのよい御家老ごけらうの梅澤うめざわ様といふお方も腹はらを切きて死しむたとの事じや」 民「なんじや梅澤右京うめざわさくら様がアノ腹はらを切きて死しかれた、ソリヤ亦また一休いつしゆ何ういふ理由りゆうで」

善「其理由そのりゆうといふは斯かくうじやそうち竹田の子息しやくと梅澤のお嬢様ぢやうさまと親々の身の上みんの上を氣違きちがふて御殿ごてんのお庭にわへ忍しのびしを竹田左京たけださくらが捕とへて突出つきたし謀叛まうはんの罪つとに陥おとした上其工たくみ人は梅澤右京うめざわさくらと氣違きちがひ領主りやうしゆに焚附たきつきけて梅澤うめざわ様に詰つめ腹切はらきらせ自分おれは夫を手柄てがまに閉門へいもん免めんされ元の通とほりに出仕ししてのささり返かへつて居るさうなが氣きの毒どくなは右京さくら様憎にくい奴やつと竹田左京たけださくらマア人の心こころは分わらぬものではないかいのウ」 民「そんなら左京さくらは心が變かり」 市「チ、サ左京さくら様さへ夫なれば」 作「モウ他に誰たれ一人氣違きちがひ殿てんに」 耕こ「異見いけんする者ものもなければ」 善「モウ此國このくには」 四人よにん「あかぬわいのウ」 民「ム、」ト沈思しんしの思入しんい此時このとき向むにて」 大老だいろう「ハイホウト聲こゑする」 おどめ「アノ先拂せんぷちひは領主りやうしゆ様が戻かへつてうせたと見えるわい」 善「ナニ領主りやうしゆの通行つうぎやうどか」 民「今狹いま韋川わいせんより」 善「水馬みづうまの戻かへり」 民「其御通行ごごつぎやうに出會いひは願ねがふてもなき今日の幸さいはひ今の様子を聞くからはコリヤモウ棄すては置おかれぬわい」 作「コレ民蔵たみくら相あして何處どこへ行いくのぞや」 民「何處どこへ行いくとは思案しあんがあるのぞや止とめてくれな」 耕こ「止とめてせぬが汝おれの煙管えんぐわんと替かつて居るわい」 民「エ、夫おれどころの事ことじやないわい」ト耕作こくさく突つき退ひけツカ、と花道はなぢへ行いく此時このとき向むにて」 大老だいろう「ハイホウ」ト先拂せんぷちひの聲こゑする民蔵たみくらは心附こころつきさしこなしにて尻褰しりぢげを下くだすのが道具道具替かりの知らせ皆みな々は合あ点てんのゆかぬこなし民蔵たみくらは向むへ走りはしり這入はいる」此摸この様よう宜敷よろしくく馬士まじ唄うたにて此道具この道具ふん廻まわす

○本ふたい平ふたい、下手より上手へ準へになりし山の書割、向ふ狭章川の流れを見たる遠見、所々に松の立樹、爰に秋政ふつさき野袴裏金の陣笠を冠り黒馬に乗り馬丁馬の口を把り居る、上手に熊澤丹下、下手に宮津六郎治前幕の諸士四人何れも野袴ふつさき網代の騎射笠を冠りし拵らへ、ふつさき野袴股立の與力四人十手を腰にさし、其他明手惣出の人敵近習の扮装にて立懸り居る、此見得半廻りより大小入りの合方にて道具納まる」秋政「いかに者共治に居て亂を忘れざるは武士たる者の心掛なり依て一は馬術を試みんと俄然に思ひ立しより狭章川に馬を乗入れ大河を越へし秋政が水練の程何うぞや恐れ入つたであるうがな」丹下「實に君には弓馬劍術武門にあつて心掛べき道に秀で給ひし事天下の人誰あつて存せぬもの一人も無之し彼の宇治川に先陣を争ひし梶原佐々木と申せども争で君に及ぶべき恐れながら御水練の程我々感心」秋政「強將の下に弱卒なしと近習小姓に到るまで我に續いて大河を越しと日頃の心がけ今日に形われ秋政心に適ふたぞよ」秋政「恐れ入りましてムリ升る」秋政「歸館の上は熊澤丹下今日の賞として夫々へ褒美を取せよ」丹下「委細畏こまり奉る」ト此時向ふにて」○「下れ」下りぬろろぞ」ト是をバタ／＼に成り向ふより民藏走り出で来る後より足輕二人六尺棒を持ち出て來り民藏を支え」○「下れといわば」○「下り居らぬか」民「假令何のやう

なるお咎めを蒙ひり升ども主君に直々に目にかゝらぬ其間は」丹下「殿へ直々お目通りと」皆々「願ひたしと」民「おねがひの者にムリ升る無禮と許して下さりませ」ト足輕突のけ舞臺へ來る六郎治立塞がり」六「ヤア成らぬ」願ひあらば其筋の手を経て申出べきに」丹下「直訴は堅き禁制なる事」皆々「存じ居らぬか」民「いかにも直訴は御法度なる事存じて参りし私事と御領分の百姓民藏と申者何卒お目通りの義おねがひ申上りる」秋「ヤア聞バ百姓の分際にて此秋政に目通りせん」と身の程知らぬのみならず禁制を心得ながら控を破る憎くさ奴、ソレ繩打テ」四人「ハッ」ト與力双方より左右の腕を捕へる」民「假令主君の仰せにもせよ捨て置れぬか國の大事」皆々「なんと」民「此民藏が云ふ事を聞てお憤り申さぬ間はいつかな繩には」ト兩人を投のけ」掛り升まい」ト秋政馬より下り」秋「返す」も不禮の匹夫め、イデ眞二ツに」ト拔打に切てかゝるを民藏掻い潜つて其手を捉ゆる此時向ふにて」左京「アイヤ暫らく」」秋「誰かと思へお待下さりませう」トバタ／＼に成り左京ふつさき野袴にて出て來る」秋「誰かと思へば」丹下「相役竹田左京殿」秋「止なく」左「アイヤ我君お止めは仕らず君に今日本觸もなく俄かに狭章川にて馬術を試し給わん爲め御出馬わりしと承わり後れながらに馳せ参せしに見受けし所君へ慮外の土民が狼藉か手討とのお怒りは至極御尤もに存り升る

秋「夫に何故止めたるぞ」 左「サア多寡の知れたる匹夫一疋君のお手を汚す迄もな

く丹下殿何故首は刎ね召れぬ拙者お供にあるをれと得こそは口を開きまじきにお供に遅れ

て甚だ残念併しながら承はればお國の爲めに申上度き子細あるよし、畢竟此奴狂氣せし者

に相違なし我君お聞に相成ばとてれ耳を汚がす迄の事是も時の一興なればお聞取り遊ばせ

し上切らば斬り給ふも又お慰みかど存じ升るが丹下殿如何でムる」 丑「何様仰せの通り

此奴狂人に相違なし其狂人の申す事聞あるも又一トしほのお慰み、君には暫時お佩刀を

お収めあつて」 皆々「然るべう存玄升」 秋「余へ對して無禮な匹夫一分だめしに致す

ども飽き足らぬ奴なれど左京が申す處面白し然らば汝の勸めに任さん左京近う」 左「ハ

、何れも御免、ト本ぶたいへ來り」 左「ヤイ土民夫へ出い、唯今承はれば我君へ何か言

上の筋ある由其方如き匹夫の詞を聞し召る、我君のお身柄ならねど狂人と存する故某代つ

て聞てくれやう言ふ事あらば疾く申せ」 民「ハ、狂人といふ事は氣違ひといふ事か

此民賊と腹からの百姓なれば無學文盲小むつかしい事は知らねど唯知つたのは親に孝行慈

悲善根御領王様を神佛様と崇めるより他に何にも知らぬ智限の民賊汝のやうな上邊計りは

忠臣願して腹の腐つた汚ない奴とは違ふて居るのじや」 左「黙止れ匹夫外部計りの忠臣

とは竹田左京を指て申すか」 民「知れた事ぢや」 左「何を以て不忠と申すぞ不忠の所謂

承こらん」 民「言ふぞよ」 左「京聞かう」 民「ユリヤ能く聞けよ、此民賊と米一粒

上みの祿を食む者ならねど殿の惡逆無道をば他領の者に替られるが悔しう思ひ行末は何う

なりゆく世の中かと案じながらも御家中には梅澤様といふ御家老あれば聽て下の困窮を救

ふて下さる事もあろうと思ふたお人、罪に落し自己の身をば大切に主家と思わぬ不忠不義

られ憂き目を見せたる其上にて刑罪場に曳き出し斬罪に行われん然すれば御領内の町人百姓恐怖なし再度上の御政治を兎や角う申す者もあるまじ丹下殿如何でふる」

丹「實に貴殿の思し召は最上の御所分左すれば諸人の見せしめにも相成ると申すもの」

秋「ム、流石の左京好き所に心が注た此奴の首を見ざる間は秋政憤りは散せされども汝が言葉に任すであらう」

民「スリヤ何うあつても殿様には民百姓の困究を救ふて下さるお慈悲とないか」

秋「くどいわい」

民「鬼でも蛇でも此様な」

秋「何ぞ申すぞ」

左「アイヤ殿には御歸館」

ト双方氣味合あるのが道具かわりの知

らせ」

皆々「あそばされませう」

ト與力四人は民藏に繩をかける」

此模様宜敷く合方にて此道具ぶん廻す

○本ふたい元の茶店の道具に戻る、爰に前幕の清七腰を懸けて居る、此模様馬士頃にて道具とまる」

おき「若旦那あらひ事でムり升る」

清七「ナニあらひ事とは」

とめ「サア今仰つしやつた智隈村の民藏といふ人が主君が狹草川へ水馬にムつた歸り途唯さへ人が斬たい」と思ふてムる殿様へ異見をした科に依り今お手討にあるとの事」

とめ「エ、そんなら常に下々の難義を苦に病で居た御政治の事で殿様へ御異見をば」

とめ「夫じやに依て波多な事と言れませぬ」

清「いかに日比の氣質とてあらひ事してくれたなア」

ト此時向ふより民藏本纏に懸り與力四人繩を把り六郎治附添ひ出て來り直に本ふたいへ來て清七と顔見合せ」

清「民藏さんか」

民「サ、清七さんでムり升るか」

清「好う無事で居て下さつたのウ」

四人「コリヤ」

近寄なく」

六「サ、其方は去年外山八幡で出會し信濃屋清七此者とは悪意か」

清「ハイ近づきの段ではムりませぬ義堅い氣性に惚れまして」

六「黙れ此土民に君へ不禮の科に依り唯今より牢舎申附け追て斬罪に行わる囚人」

清「そんなら民藏さん矢張りお前之上の仕置に」

民「サア夫故に所詮此世では逢れぬ身を諦らめて居りましたが料らすお目に懸りましたは天道様のお引合せ然しなから此姿面目のウムりませぬわい」

清「何の夫も國の爲」

六「扣へい國の爲とは何を申す輕からざる大切の囚人近寄る事は相成らぬ、ソレ引立イ」

四人「心得ました立テ」

民「イヤお役人様、チト此人に言ひ遣たいことがムり升る何うを暫らく御猶豫をば」

六「ヤア此奴何を申す少時は愚な事詞交すも相成らぬわい」

清「イヤモウシ何ういふ理由かは存ませぬと何か此清七に申したいことがあるとの願ひ故其處がお上のお慈悲にて」

四人「ヤア成ぬ」

清「成程ならぬとおつしやるの御道理でムり升れと身分と賤しい百姓をれと逃げ隠れ致す様な仁ではムりませぬ御無体な願ひながら萬一粗相の義もあらば私を如何様と御法通りの御刑罰仰せ附られますとも更々厭ひは致しませぬば何

うを暫しが間清七にお預けなされて下さるやうお願ひ申上る」 六「スリヤ何と申す方
 一此者に粗相あらば其方代つて上の所刑を受ると申すか」 清「仮令逆磔の御仕置を受ま
 すとも」 六「ム、好いッ、姉が先達面上の疑ひ蒙むりしも辯解立て赦免と成り元の如く
 奥を勤むる中老静江其弟なれば豈夫言葉に相違あるまい願ひの趣き聞届けた」 清「ス
 リヤお聞届け下さりますと有難うムり舛る」 六「併し爰に相待といふ譯にも参らずコ
 リヤ茶店の老婆其方の宅は此邊りか」 六「ハイッイ向ふに見ゆる家でムり升る」 六「
 然らば宅まで案内致せ其方々にて休足致さう」 六「左様なれば斯うお出なされませ」ト
 おとめ附添ひ六郎治與力四人下手へ這入る」 清「民藏さんひよんな事になりましたなア
 「ト読らへの合方に成り」 民「常にお話し申す通り何うぞ力に及ぶだけ命を捨ても殿様へ
 御異見を申上げお國數方の人達が未の間の悪政に寤しむ難義が助けたいと夫ばかりが願ひ
 にて今日の御通行を幸ひに御異見申上た其事は一ツとして取上げられず斯ういふ身になり
 ました是では此國が今に野原になるであらう」 清「民藏さん道理じや夫程迄にお國を思
 ふ忠義をば露はともおもぬ主君の非道とて斬罪とは餘まりじや」 民「夫も今更悔ひた
 とて返らぬ線言、夫につけてもお前さん頼み置たい後の事といふの他でもない唯氣の
 毒なお才どの便りに思ふ一人の兄の義助殿には死別れ今又此身が斯ういふ有様、斯うい

ふと押附がましい様なれどもお才どのをば何うぞお前さんの女房に、イヤ隠さつしやり升
 な情交ある中といふ事は常から察して居る民藏御迷惑でもムりませうが引取てやつて下さ
 りませ」 清「イヤ其事なれば民藏さん決して下さるなお前に言ふのも面目ないが
 商賣向の事からしてお才さんと言ひかわし末之女房に貰わふと言ふ約束もお國の騒ぎで今
 日迄延引には成りましたが早速翌日にも私が方へ引取と致しませう」 民「そんなら引取
 て下さるか、ヤレ〜夫で心が落着きました」ト此時以前の六郎治與力附添ひ出て來り」
 六「ヤイ民藏願ひの趣き一應之聞届けたれど時刻が延る最早猶豫はなりがたしキリ〜立
 テ」 四「立居らうぞ」 清「左様でもムりませうが此上に清七が一ツのおねがひ、と
 申上るご何うか明日まで此仁の縄目を免してやつて下さりませ」 六「何と申す」 清「
 サア罪科極りし科人の縄目を解くといふお上に御法はムりますまいが其代りに此清七人
 質として縄をかけてお牽き下さりませ」 民「イヤ〜止にして下さりませ唯今の事さへ
 頼ひで置けば何の予も智隈の民藏心掛りはムりませぬわい」 清「夫はお前の氣性故何彼
 に未練はあるまいが又と逢れる身ではなし氣強い程猶清七が心の裏が想ひ遣られ升程に少
 しと清七が信義も無にせず民藏殿余が頼みも聞て下され」 民「何にも申ませぬ古い願染
 といふもでもない昨今の民藏を夫程迄に思ふて下さる御親切は忝けなけれど何のお前さん

お上にそんなお慈悲が何うしてムリませう」 六「イヤ其願ひかなへて遣こそふ」 兵「エ、」 六「清七汝が科人に代り人質にならんとあれば何も情けじや願ひにまかせ明日の巳の刻まで細縄を免して遣はそふ」 清「スリヤ願ひをかなへて下さり升るか」 兵「有難うはムリ升るがお身に一点の科もない貴君に繩を掛さしましては」 清「そんなお前は友達の義といふものを捨させなさるか」 兵「然ういふ譯でなけれども」 清「一人の親ある体心の理は民蔵さん身につまされて推量して居り升わいなア」 兵「夫じやといふて」 六「ソレ繩を渠に掛替引立召れ」 四「ハア、」 兵「イヤ、夫では濟ませぬ」 六「民蔵は繩を解れまいと捨せりムにて藻掻くを與力四人は繩を解きて清七を縛り引立る」 兵「そんなら何うでも」 六「願ひに任せし上の慈悲明日未の刻を過ぎば人質の清七首を打放すぞ」 兵「左様な事を仕られましては」 清「アコレ民蔵殿儀が寸志を無にせずと智限まで五里の道心靜かに現世の暇を」 兵「其御親切を忝けなけれど」 六「近寄らうとするを六郎治突さ倒し」 六「エ、時刻が延る」 四「キリ、立う」 六「與力と清七の繩を把り六郎治附添ひ上手へ這入る民蔵起立り」 兵「モシ清七さん待て下さりませ今の事さへお前が承知して下さらば他に心遣りのない民蔵モシ清七さん、ア、モウ行れたか」 六「本釣の合方に成りヤツと思入此時上手より右京着流し大小深編笠浪人の拵らへに

て出て來り様子を伺ひ居る民蔵は心附す」お國の爲には親をも子をも元より厭わぬ心なりやこそ命を捨て主君へ御異見申た此民蔵、死ぬる臨終に両親や妻子の者に會そうと儼に代つて下さつた清七さんの心切を無足にしても本意ならねば一ト先在所へ一ト行かゝる此時右京前へ出て」 右京「民蔵とやらお待下され」 六「編笠を取る」 兵「ついで見もせぬ御浪人何の御用か存ませぬが心が急ば」 右「イヤ先刻よりの一伍一什は彼處に於て承わりし詞の中に義兄弟の義助とありしが今は徳岡村の義助でないか」 兵「いかにも左様でムリ升るが其義助を御存じの貴君様ぞ」 右「子は名もなき浪人なれども仔細あつて其義助に一度面會致せし事あり聞けば天眼寺に於て焚死せしよし、ア、寔に揃ひも揃ひし忠義の」 兵「アイヤ御浪人シテ呼び止めし御用の筋は」 右「イヤ夫さへ聞けば用事とムらぬ」 兵「何うやら怪有な」 右「早く行れよ」 兵「何の事だへ」 六「ト足早に向ふへ這入る此時下手より左京以前の拵へにて出て來り右京跡を見送り」 右京「信濃屋清七初めとして武士も及ばぬ町人百姓」 左京「御浪人テモ感心な者ではムらぬか」 右「左いふ貴殿は左京殿」 左「應此程よりの御因究」 右「お察し下され是も忠義の」 六「此時下手より仲間二人出て來り」 仲間「お旦那お迎ひ」 六「ト言ひながら下手に扣ゆる右京は驚き編笠を冠る左京氣を變へ」 左「不禮な浪人手の内無いわい」 六「ト懐中より金を出し袂より密と

投げて遁る右京拾ひ上げ左京の袂を曳き」 右「コリヤ巨額の」ト言ひかけるを左京打消し」 左「エ、附くなど申すに」ト袖を荒く叩き舞ふのが本の頭」 右「バア、」ト拍入て頭を下げる」 左「サア参らうか」ト此模様宜敷く驛路入り馬士唄にて○拍子幕

六幕目 智隈村民藏住家の場

松崎船渡しの場

役人替名	
一百 姓 民 藏	一老 母 ね 信
一百 姓 民 右衛門	一義 助 妹 お 才
一女 房 お 光	一土 鼠 の 善 太
一在所 唄 お 桑	一同 お 米

竹本連中

○本舞臺平ふたい、見附け中央納戸口、上方押入、下手鼠壁、上手反古張り折廻りの障子冢体、下手在所唄、いつもの所藏葺家根の門口、すべて知隈村民藏住家の体、幕の内よりお光さら毛の髪病 鉢巻世話女房の拵らへにて赤子を抱き蒲團の上に住み居る、下手にお才島田かすら在所娘の拵らへにて生糸を繰り居る、お米お桑百姓女房の拵らえにて住る

此模様郷唄にて幕ひらく」 お米「お光さん今日は加減は何うでムんすへ」 お光「好

う尋ねて下さんす今日は平日より快よい方でムんすが何分一年越の煩らひにて乳の出ませぬのが唯不慮でムんすわいなア」 お桑「ほんに病を病む身より見る眼がつかいと近所の私等でも氣の毒でならぬわいなア」 米「夫にしてもお才さん夜なべとはさつう精の出る事でムんすなア」 お才「何う致しまして精の出るどころでムんせぬが長の間御厄介ゆゑ切ては覺えし手業なりともせねば濟ませぬわいなア」 桑「夫にさアお前の兄さんは去年家出をしたなりに今に便りもきいどの事、サ、其便りといへば民藏さんから何ぞ便りがありましたかへ」 米「サア夫も去年の水難に引續いたる今年の早米一粒獲ねどもお上よりと相も變らぬ御年貢の殿しい取り立コリヤ斯うしては居られぬと権の木村のお庄家様へ三月以來雇はれて参つて居り升が何らいふものか二十日余り何の便りもない上に賣つてくれとて此お子が曳き溜の糸をも持つて往たなりで今に沙汰のムんせぬは何うした事かと案じくらし居り升のいなア」 米「サア其上の御政治も何日迄も悪い事ばかりもムんすまい又安心する時節もあろう程に夫を待より外に仕様はないわいなア」 桑「其時節の來るのを待る、身なら好ければ此比でと稷のお粥も吸り兼親は辛抱するけれど子に饑るいと言せるのが立ても居ても居られぬ故」 米「御無心ながらお光さんお錢を四十程貸て

「光」夫はマアお安い御用でこもり升が今いふ通り二十日余り良人が戻
 られぬので、併し今にも夫の戻り次第お錢を持せて上げ升のいなア」 桑「そんなら何う
 ぞお光さん民藏さんが戻つてならお頼み申升のいなア」(ト兩人捨臺詞にて橋懸へ這入るお
 光は癪の差し込むこなしあつて) 光「アイタ、」 おオ「ア、お光さん又差込みでム
 んすかいなア」(ト是を赤子笛に成り) オ「チ、泣しやんすな、サア其お民さんを此方へ
 貸て下さんせ」(ト赤子を抱き取り)「チ、泣しやんすな、直にいつもの伯母さんにお乳を貰
 ふてあげる程に大人しうしてお呉」(ト捨臺詞にてお光を介抱する是より床の上るりに成る
) 上るり「されば静けさ世の中も上み邪しまの暴政より下の人心穏やかならず動き立たる
 三枝領内數方の人に代らんと胸に覺悟を極め時未の刻と限りある屠所の歩みの歩むらす
 夜道を戻る義民の民藏」(ト此上るりの内お火鉢に薬土瓶をかけ赤子を抱き花道へ行く此
 内向ふより民藏腕を組み思案のこなしにて出て來り花道にて行き逢ひ) おオ「チ、民藏さん
 ん好う戻つて下さんした案玄暮して居たのでムんすわいなア」 民「シテ親様や母者人
 に變つた事も」 オ「アイお達者でムんすけれと唯お光さんの病氣がはかばかしく行ぬの
 で是から乳を貰ひに行く所、ソレ民さんお父さんか戻つておやわいなア」(ト赤子を見せる
 と) 民「二十日計り見ぬ間に又此類の落たことわいな」 オ「是じやに依てお光さん案じ

なさるも無理でこない、サア早う戻つて下さんせ」 民「ハテ其様に急いでも宜い事じや
 ト」(本舞臺に來て) オ「モシ、」お光さん民藏さんが戻つてじやあつたぞへ」 光「チ、
 こちの人戻つて下さんしたかいなア」 民「我家なれば戻りもせうかい」 上るり「内入
 り悪き民藏が詞にお光心もつかず」 光「お前の家も戻るに違ひとなければ二十日余
 り便りがないゆゑ案玄居たのじやわいなア」 民「ハテ雇われて居る身体暇がなければ
 便りもせぬわいな」 上るり「常に異りし民藏が詞の角に女房も不審と思へど左あらぬ願」
 光「したが先度お前が持て戻つて下さんしたお錢で今日まで浚いで居たが翌は何うにも
 ならぬ事お前知つて居りながら」 民「知らいでかい其困究は民藏一人か三枝領内一般じ
 や夫が何うして珍らしい」 光「何の珍らしい事がムりませう何れも同じ貧苦の中にも今
 お米さんとお桑さんがお錢が四十借たいとて見え話しを聞てみれば氣の毒ゆる雇われ賃の
 其内から何うぞ貸て上げて下さんせ」 民「錢はない」 光「そんなら貰ふて戻らしやんせ
 ぬのかへ」 オ「そんなら日外持て住て下さんした生糸の代は大かた貰ふて」 民「イヤ
 其金も持て戻らぬ、錢金といふものは一丈薬にしたくも持て居ぬのじや」 オ「そんな
 らアノ生糸の代や」 光「二十日余りの賃錢は」 民「消費ふて仕舞ふた」 兩人「エ、
 」 民「此山奥の在所と違ひ城下近くの調法に二十町先へ踏み出せば花町の色街のと一ト

晩行ば忘れず行けば行く程面白く娼妓買といふ事を己りや始めて仕て見たが又女房と格別で土臭い事があいなわい」 上るう「心に一物ありぞとは知らぬ女房米れ果」 光「コレこちらの人、いゝゑいなア民藏どの、三月以來鍋屋村へ雇われて行しやんしたは二年此方不行にて年貢の納めもならぬ上暮し向さへ立ぬゆゑ天程内の困窮を知りつゝ女郎狂ひとは何事ぞ其様な遊びに往てもろうたのでしんせぬわいなア」 民「ハテ何を仕様と男の働らき夫を不足と思ふなら暇状書てやるまでじや」 光「そんなら私をば去る心で戻らしやんしたのかいなア」 民「マアそんなものでわろうぞい」 光「エ、お前はなア」 上るう「奥より母親お信盲目のこなしにて出て来り」 お信「コレ嫁女静かにしやいのウ」 光「モシ母さん民藏どのが妾をバ」 信「ハテよいわいの、コレ民藏何處に居やる」 上るう「と探り寄り、コレ悴今聞けば色町で遊女買ひをしたとの事年とつた其上に目かいても見えぬ此母と足殿立ぬ親父どの加之へて去年から病氣で居やる此嫁女内の爲をおもへばこそ格氣も少しは世帯の道具、したが嫁女モウいやんな何も彼も知り抜いて居る悴なれば此後行さそうな筈もなし遣ふた金と稼げば濟こと、無草臥ても居やう程に今宵は機嫌好う寐てたもひのウ」 上るう「子には目のなき母親がいたわゆる程猶我胸にヒシとこたゆる切なさぞ内に

飲み込む涙の煙に咽て居たりける』時に一ト間に咳と聲」 民右衛門「婆どんく」 信「ソレ見やいのウ親仁殿が何うやら起て居らるゝ様子」 上るう「若や阿りもすまいかどウロツと廻るぞ道理ある父と一ト間の障子押開け」ト上手障子を明けると民右衛門白髪かづら親仁の拵らへにて木綿蒲團の上に住ひ居る」 民右「悴が戻つて居る様子夫へ往て逢ひませう」 上るう「と一ト間の裡よりいさり出」悴何時戻つた」 信「アイたつた今」 民右「何をいふのじや最前からお光をどらへて無理の八百己りや何も彼も聞て居たのじや」 光「そんなら此場の」 光「オ、様子をバ」 信「未だ寐もせず」 民右「何の夜の目が寐らりやうぞ」ト床のメリヤスに成り」今聞て居ればお才どのから頼まれた生糸の代まで使用ひ捨てたど手柄らしい女房への男呼わり、コリヤ此お光はな嫁どはいへど此村では庄家様のお娘じやぞよ親御の重太夫様御存生の時汝がやうな不所存者でも何處が好いやらお意にかなひ汝がやうな小前の家へ嫁に下さつたお蔭をもつて御政治さへ宜かつたら後世安楽に送らるゝも皆此お光が持參の田地夫を思へば亭主の無理を聞て居さうぞ嫁ではなけれど去年からの病氣といひ今は親御の家さへも死絶へて形迹なき故是非のウ汝が言ひたい儘を水に流して取合ぬ心の内を察してみれば己りや涙が溢れるわい其女房に無理ぬかす口があるから一國の民百姓に成り代り仮令生命を捨るども御領主に面と向つて御政治改革

の異見でも汝りやなせ仕をらぬのじや此民右衛門足さへ利ば御殿の内へでも飛込ひで御異見の一ツもする氣なれども三年前の痛風が原になつての此覺、れ上みへ忠義の心も亦く思ある女房子にまでも義理も情けも辨まへぬ親へ不孝の畜生めが」上るり「強毅訥朴仁道にちかき心の誠をば並べ立たる父親が怒りを胸に納めた願付」民親父様モウいふ事は夫だけか」民右「どうしたと」民「そのやうな囁語を民藏聞には戻らぬのじや」信「コレ民藏何うしたものじや親仁どの、言つしやるのは皆道理じやわいのウ」上るり「子が可愛さに氣を遣ふ母を民藏取て突退け」民「何じや親仁のいふ事が尤もじやコレ母者人夫が皆な和女達は老耄をして居るのじや」民右「ヤイ悴年こそ寄たれ民右衛門間違ふた事いふ乃公じやないわい」民「夫が間違ふて居るのじやわい親じや〜と大層らしう何を仕置た事があつて親風を吹すのじや此子といふものがあればこそ片輪な身せば養われ斯うして居らるゝのも誰のお蔭じや老人たてらに何じや今聞ておれば國の政事か悪いゆる民百姓に成り代り異見とするの何のと夫が第一老耄のしるしぢや何故といわんせ御領主と御領主だけの此世に徳をもつて生れ座して喰らふを下々から年貢運上差上るこコリヤ當り前上みの政事が悪いのイヤ非道のと罵るゝ泣く子と地頭といふ譬を知らぬ白痴のいふ事其上を恨むやうな根性もえ腰も抜け目も潰れ片輪に成つた報ひを知らぬ野當りめ」上るり「

いつになき子の悪口を聞く爺親、呆れ果拳を擲る腹立を目にこそ見へお察しやう」信「コレ悴邪、まなお上の政治を尤もと思ふ故が心では親に向つて何日にない其悪口も心底から本性に違ひとない、産聲上げた其日から手墮にかけて成人をさした親の思は譬にもいふ須彌蓋海といふではないか兩親の恩を忘れそなた濟かいやい〜」民「濟すバサア何うあどせい〜」上るり「其身を其處へ大の字にふんどり反つて傍若無人母は手さへも付られぬ我子の体に堪ひかね」民右「おのれがやうか不孝者は親が成敗今からたのれ勘當ぢや」民「何じや勘當じや夫をば侍て居たのじやわい」信「コレこちの人間を言しやんすぞいなア常に親御に何一ツ口返答せぬお前が今日に限る其様な親御様への悪口も長の間煩らひに病はうけたる妾もゑ女房に愛憎が盡果て好た女を内へ入れる心でムんせう夫は更々厭ひとせぬけれも野姪のお二人がお前を勘當しられたら翌から養ふ人もなし餓死なさんすゝ知れた事添ひ遂げたい女があるなら心の儘に添ふとて御勘當ばかりは何うぞ詫して下さんせいなア」上るり「夫が死でも迷ひどとさめ〜泣入る女房を尻目に涙片頬に笑み」民「アハ、、乃公から言ぬ其先に好ら其方から吐し居つた遠から飽の來た女房去年からの長煩らひヂツと辛抱して居たらガツクリ往生するであらうと思ふて居たにねばり強う死もやらす生もせず身体も利ぬ分をして倍氣は虫に障るのじや望みの通り観くれ

た死ぬのの汝の勝手にさらせ」 オ「モシ民蔵さん最前からの様子を聞けば聞く程胸惑な
 然ういふ邪見な方とは知らずに今日迄お世話にあつたお禮は有難う申升る」 上るう「行
 かんとするを民蔵裾を引捕へ」 民「コレお才さんお前何處へ行くのじや」 オ「何處へ
 行くと私の勝手お前のやうな恐ろしいお方の世話にならぬわいあア」 民「イヤ滅多に違
 られぬのじや今日迄乃公の世話に成りお禮は有難うとて口捨の返禮で滅多に愛を去さうか
 」 オ「そんならお禮は何うしたら心が濟のでんすぞいなア」 民「己は抱き寝が仕た
 いのじや」 オ「エ、」 民「ナニ驚愕する事がある、原はどいへば見ず知らずの他人を
 内へ引摺り込み貧しい中で世話したも其美しくしい和女の器量に惚れたが病ひの女房を去つ
 た跡と和女へ仕替る遠から乃公の了簡、行くなら一緒に此内を出て行く覺悟で受た勤當手
 に手を把て引で行う」 光「コレこちらの人そんなら妾に愛憎すかしもお才さんにマアお前
 は」 民「汝がやうな腐り女房と此小町のやうなお才さんに代られうか」 オ「そんなら
 お前は何うあつても」 光「お才さんをば私に見返る」 民「ナ、女房は去つたお才来い
 」 上るう「引立奥へ走り入る」ハアと計りに泣き沈む嫁が心を思ひ遣り父も憤しと思へど
 も立も立れぬ足なへの母もウロ／＼涙聲」 信「ナ、道理じや尤もじや七年以來連れ添ひ
 し男と思へば邪見な奴でも悲しいは無理ならぬと病氣さへ本服すれば再嫁と何うでもなる

事」 民「有それも前世の悪業にて」 信「諦らめては居るものを」 民「直懼い悴を持
 たと思へば」 二人はんに不孝なト立ぬ腰にて起うとして下に居るのが道具替りの知
 らせ」 懼い奴ではあるわいのウ」 上るう「泣々にトお光は赤子を抱きしまゝ忍び泣に啼
 く」此模様よろしく床の三重赤子笛にて此道具ふん廻す
 ○本舞臺常足の二重、上手佛壇、下手鼠壁、葉葺屋根、前側に簾をゑろし、上手後へ寄せ
 て半窓の鼠壁、此前四ツ目垣、下手早焼の田畑を見たる在体の遠見、此前稻村、いつもの
 所片開きの簾戸、すべて民蔵住家の奥の間の模様、床の三重にて道具とまゐる」 上るう「暮
 過て早夜も更て行空の雲も疎らに雨含み雲の往來も定めなき秋を身に知る民蔵が涙と袖に
 をく露の深さ思ひの有明に身の成り行を細々と筆も心の走り書き最期を急ぐぞ哀れなる」
 前側の簾を巻あげると民蔵行燈の下に遺書の表書をして居る下手にお才泪を拭ひ居るお
 才思ひ入あつて」 おオ「そんなら二人の親御達に御勘當を受けたのもお光さんを離縁し
 たのも然ういふ譯でんまたか何故夫を斯々と打明ては下さんせなんだ」 上るう「いへば
 民蔵涙を押へ」 民「固より一國の人に代つて死ぬる覺悟の此民蔵心にもなき親への悪口
 病ひに惱むお光への愛憎づかしも他所ながら暇乞に來た民蔵が心の裏の切なさくるしさ推
 量して下された才どの」 上るう「推量してと手に持し手紙の墨もかわかぬに涙こぼれてに

じみけるお才と聞くに猶悲しく」　オ「シテ夫程の科を連れてどうして茲へ」　民「人質
あつて翌までの縄目を免され戻りました」　オ「シテ其人質と言しやんすはお前が深う言
ひ交じた信濃屋の清七さんをば」　オ「エ、そんならアノ清七さんを、斯ういふては濟
みませぬが清七さんのお身の上若も事でもあつた時は妾しや何うせう何うしませう民藏
さん早う往で下さりませ」　民「なんの清七さんを殺す程なら是程の心遣ひはしませぬわ
いの又お前さんを恣に置ては己が罪にて何のやうな難義が懸らぬにも限られず若も事が
あつた時は死なれた兄御の義助殿へ義埋が濟ぬ」　オ「合点のゆかぬ其お詞兄の義助が死
なれたとは」　民「今現世に亡きほどに清七さんを便りとなし夫婦中好う添ふて下され
」　上るう「と往んとするを錠り附さ」　オ「兄様が此世に居ぬとは氣にかゝるどうぞ様子
を聞して下さんせ」　上るう「兄が最期を聞しより氣も半乱のお才が心中思ひやつて墜乎と
座し」　民「コレお才さん其兄御は去年五月二十八日御領主の姫君諸共天眼寺で焼死たわ
しの」　オ「エ、」　民「サ、夫といふたら和女はんが賑や悲しう思ふであらうと今日迄
隠して居たなれど己も死ぬる体ゆる今端に明す兄御の様子夫じやに依て刑罪は明日未の刻
を限りどある宮津六郎治様のお詞なれども少とも早う清七さんの縄目を解てお前と女夫に
」　上るう「立を遣じと又も引止め」　オ「そんならアノ宮津六郎治の差圖でムんすかいな

ア」　民「チイのう」　上るう「と聞てびツクリ」　オ「其六郎治云ふ奴は二人が中を知り
抜て居る奴なればゴリヤ必定戀のかなぬ遺恨を妾へ持出して清七さんを殺す心でムんす
わいなア」　民「エ、」　オ「ゴリヤ斯うしては居られぬわいなア」　上るう「情夫を念ふ
女の一心城下を差して走り行く」トお才様からげをしながら素足にて向ふへ走り這入る」
民「コレお才の待ぬかい、夫ではアノ六郎治といふ奴は遠からアノ子に惚れ居て清七
さんと其交情を知つて居ると、エ、失策たわい」　上るう「ゴリヤ斯うして居られま
まど續いて往んと身ごしらへ奥には様子聞く親が蹙つ探りつ出ながら」ト民右衛門お信出
て來り」　民右「ヤレ悴待つて呉れ」　お信「待てたもいのう」　上るう「と言ふにギツク
リ左あらの風情」　民「母者人に親父様勘當受れば阿迦の他人の民藏に用のあらう筈とな
し心も急ば」　民右「サア心の急は尤もなれど今宵限りの命と思へば」　民「そんなら此
場の様子をば」　民右「親に明して」　兩人「くれぬぞい」　民右「いつにない親への悪
口耐えかねて勘當心したお才どの、身もいかに後からついて様子を伺ひお才どの
への一伍一仕の咄しは残らず奥にて聞た流石は民藏出かしをつた夫程健氣な子と知らず勘
當したは親の過まり婆さん其處へよいやうに民藏へ詫びしてくれ己りや今更口がわかぬ
こい」　信「コレ民藏常に我強い親仁殿さへそなたが健氣の様子を聞いて男泣に泣しやつ

た心の裡を思ふてみれば、應嫁女にも悲しからう唯何事も了簡して嫁にも一ト目達ふてやつてたもいのウ」上るウ「母が頼みの詞さへた光は待兼ね一ト間より病苦を忘れ走り出で」

光「モシこちらの人聞けばお國の其爲に死ぬる覺悟で最期の愛憎すかしはソリヤ聞えぬ隠す事明し合ふが夫婦の中ではムんせぬかいなア」上るウ「紐う欺けば民藏も父が言葉に安堵なし」民「其恨みは尤もなれを親仁様にも母者人にも様子御存じとあるからと何うぞ現世のお暇を」民右「遣いで何とせうぞいやい親の身として子に死ぬといふやうな逆さ事事も悪い領主の下に住む因果飯合悴は首斬られ親は餓死するとても何の厭わう國の爲今日迄長生した計り子故に己りや褒られて死ぬと思へは嬉しいわい婆さんこんな好い悴をもつた親の手柄じや喜ばんせ己りや鼻が高いわい」上るウ「妻に心を思ひ遣う立派にいふて聞かせたる良夫の言葉に勵まされ」信「ナ、然うじやわいのコレ嫁女必らずとあなたも泣てたもんな親も因果でムるわいのウ」光「何のまア是が義理にも泣かれませうかいなアいかに強面の御領主とて内には足腰立ぬ父親目かいの見えぬ母様や明日をも知れぬ大病の女房子まである者を殺すとは余まうな連添ふ良夫に犬死さすとおもへば妾しや夫ばかりが悲しうムんすわいのウ」上るウ「夫が悲しうムんすとワツと計りに泣伏せば民藏、目をしばた」民「何の夫が悲しいぞい素より賤しい百姓づれの不禮と知りつゝ御馬前に

て主君へ異見をするからは切られて死ぬは覺悟の前現在實の親さへも死ぬを健氣と泣もせず喜むで下さるに汝れが泣といふ事があるものか」光「アイ」民「泣な」光「アイ」

民「泣さやるな、親父様にもお聞の通り私の纏目に代つて下さつた清七色の聞けば何うやら工みの毘に掛られそう今の話し夫を案じて行れたるお才どの、身も氣遣ひ又思人の身の上も心掛りにムり开れバお名残り惜くもモウおいとま」民右「ア、コレ悴待てくれ未練で止るでなければ是が此世の別れと思へば」信「切て嫁女にも此親にも水盃なとして往てたもいのウ」上るウ「親が頼みに實にもと黙頭さ」民「成程母者人の言つしやる通りいかに最期を急げばとて」光「親子は一世二世と契りし夫婦の縁さへも」民右「今を限りの死出の首途」信「此世の縁は薄くとも」民「未來を契る水杯」信「嫁女早う」光「アイ」上るウ「愛盛りなる我子とも切て現世の別れをと立足さへも永々の病に力なく子をば片手にむすぶ水杓の縁しも短かさ一期の別れ」トお光上手手鉢の水を杓に汲み來り」シテ此水は」民「マツ親人様より」民右「悴へ廻して」信「此母が」光「残りは何うぞ此子にも」民「チ、飲してやつてくれ」光「そんなら爺様」民右「茲へ持テ」上るウ「急ぎ立つ胸に溢れたる水や涙の玉帯酒に代たる杯はしやくに種なる女房が胸は割裂く愛さ悲しさ」ト此上るりにて盃事あつて」民「三十年

が其間御養育の御恩も送らず」 民右「杖柱ども思ふた唯一人の悴を先立て」 信「翌

から養ふ悴もなく唯餓死を待身とぞ」 光「前の世いかなる悪業にて」 民右「こんな憂

目を見る事ぞ」 信「民藏親人」 光「こちの人」 民「淺間敷き身の」 皆々「成行止

やなア」 上るう「わじさき世と身を慨ち泪の雨の千隈川水嵩増る如くなり」ト此時雨車

に成り」 民「ナ、折も折とて俄の村雨」 民右「幸ひ茲に掛たる簑笠悴に早う」 光「

合点でんす少時が間此子をば」 民「ナ、」 上るう「渡す我子も此世の別れと虫が知ら

すか泣き立つ子より親の取り出す簑笠も冥途の旅へ行く人と思へば胸にせぐり来る涙呑込

みのみこむで」トお光簑笠草鞋を持來り」 光「平生着馴し簑笠が今宵死に行しやんす死出

の曠着にあらうとは爰しや夢にも知らなんだわいなア」 民「是もいつか國の一搔か強訴

の時に着ると思ひしに」 民右「其國民に成り代り」 信「最期を急ぐ隠れ笠」 民「清

どの、人質に代る迄は大事の身体、お光坊主を取つてくれ」 上るう「抱く子を妻が手に

渡せば」 民右「そんなら悴モウ行くか」 民「へいあなた方には随分とにも御機嫌よろ

しう、モウお別れ申升る」 上るう「言ひつゝ立て穿しめる草鞋の紐の繩目をば急ぐ夫の心

根を思ひやるほど女房が離れ難なさ泣じやくり聞く母親も父親も最と名残を惜や身を棄て

行く子の後ろ影見れども見への闇の夜の涙は雨の横しぶさ」ト足行けば呼ぶ聲に後へ引る

「後ろ髪名残り惜氣に」ト此上るりの文句通り互ひに名残りを惜むこなしあつて民藏門下
口へ出る」是にて此道具木なしにて半廻りに成る

○本舞臺以前の貳重の下手より續さし三尺の竹椽、葺わろし家根、真中石の鞞脱ぎ、見附
破れのある鼠壁、下手繩のれんの勝手口、上手に以前の門口を残し、すべて通ひ廊下の心

、雨の音はげしく、道具とまる」ト民藏と別れを惜みながら花道へ行くお光と赤子を抱て
民藏の跡を慕ふこなしにて門ト口の柱に取り附き迹を目送るお信は探りながら二重横手の

障子を明け廊下へ出て来る民右衛門もいざりながら廊下へ出て來り三人捨せりふにて民藏
を呼ぶ民藏是に引かされ行きなやむ双方名残を惜しむこなし宜しくあつてト民藏は向ふ

へ走り這入る舞臺の三人は泣き落す」此もやう宜敷く床の三重雨車赤子笛にて 拍子幕
ト後時の鏡にてつなぎ道具出來次第直に引返す

○本ふたい通りの高足の二重、草土手の蹴込み、真中下り口、向ふ在体の遠見、二重の上
下稻村藪邊松の立樹、ふたい前浪手摺浪布を舗き、下の方に舟一艘もやひあり、松崎村渡
し場といふ傍示杭、すべて狹草川渡し口の模様、爰に前幕の善太廣袖の着附け三尺帶道樂
者の拵らへにて手拭に巻し手双庵丁を腰にさし以前のね才を捕らへ居る、此もやう雨車禰
の勤めバタ／＼にて幕あく」 善太「コレお才何も愕くりするに及ばぬへ鬼でもなければ

蛇でもねへ土鼠の善太だ」 お才、其善太さん私を捕へて何う為やしやんすぞいなア」

善太「何うも仕ねへ女の夜道之物騒だから馴染甲斐に此善太が送つてやろうと言ふものを兎や角ういふのはお才さん人の情けを無にするといふものだぜ」

オ「其御心切と有難うムんすけれど妾しは心が急てならぬゆゑ」

善「サア夫だから一緒に連れて往てやろうといふのだ」

オ「そふして何處へ」

善「宮津六郎治様のお屋敷まで」

オ「エ、」

善「今度と一番愕然だろウ斯ういふ理由だ聞てくんねへ」

ト「合方に成り」

智隈村の民藏といふ奴が國の政治に彼是といふたが不禮であるといふて翌は下河原へ引出して首を切る筈の處を彼の糸屋の清七めが人質になつたとやら其願ひを聞濟ひだは宮津様の計らひで買と懸のかなわぬ遺趣ばらしに清七の首を打放し夫で腹を癒る了箇」

オ「エ、」

善「ここで乃公が宮津様の頼みに依て宵の間から此松崎の渡し場に斯う待受けて居るといふのはアノ民藏めが戻つてうせてと宮津様の思惑が違ふもへに途中に待受け殺してくれどのお頼みだ、何うだお才乃公が平常いふ通り宮津様に随へば千石取の直ぐに奥様いくら清七に惚たどて首のなひ死人をば抱て寐る譯にもゆくめへ夫だに依て此善太のいふ通りするが其身の出世といふものだ」

オ「エ、聞けば聞く程六郎治の悪計爾ういふ較計のある上はコリヤ斯うしては」

ト「行うとするを捕て押へ」

善「ヤイ待やアがれ夫では何うでも宮津様の心に汝や随わぬのじやな」

オ「敵と思ふ六郎治に何の我身を任そうぞいなア」

善「然う強情張ば仕方がねエ民藏といふ者を殺す爲めに持つて來た此出刃庖丁で切るぞよ」

ト「目先に突つける」

オ「アレエー」

善「ソレどうだ怕からうウンと得心すれば可し嫌だと吐せば此出刃庖丁で一ト思ひ、といふのは虚言だ今宮津様へ伴て行へば己も褒美の金になる和女を殺してつまるものか夫とも達て嫌だといへば是非がないズブリと道にやア成ぬがお才坊返辞はどうか」

オ「サア夫は」

善「苦しい目をする心か」

オ「サア夫は」

善「宮津様に随かふか」

オ「サア」

善「サア」

二人「サア」

善「エ、モウ寧ろ」

オ「人殺しやあ、トお才逃げて行くを善太帯際取て引戻す此立廻りの間上手より民藏出で來り此体を見てツカ」

ト「お才逃げて行くを善太帯際取て引戻す此立廻りの間上手より民藏出で來り此体を見てツカ」

ト「お才逃げて行くを善太帯際取て引戻す此立廻りの間上手より民藏出で來り此体を見てツカ」

ト「お才逃げて行くを善太帯際取て引戻す此立廻りの間上手より民藏出で來り此体を見てツカ」

ト「お才逃げて行くを善太帯際取て引戻す此立廻りの間上手より民藏出で來り此体を見てツカ」

ト「お才逃げて行くを善太帯際取て引戻す此立廻りの間上手より民藏出で來り此体を見てツカ」

ト「お才逃げて行くを善太帯際取て引戻す此立廻りの間上手より民藏出で來り此体を見てツカ」

ト「お才逃げて行くを善太帯際取て引戻す此立廻りの間上手より民藏出で來り此体を見てツカ」

ト「お才逃げて行くを善太帯際取て引戻す此立廻りの間上手より民藏出で來り此体を見てツカ」

才「妾の爲には兄様の警敵」 民「詮議の種の土鼠の善太」 才「茲はお前に頼むだけいなア」ト上手へ走つて這入ると善太は出刃にてもやひたる船の綱を切る」是にて民蔵と尻居に墜とへたるのが木の頭是を一セイ浪の音烈しく船は流れて橋懸りへ這入る民蔵は残念のこなしにて宜敷く 拍子幕

七幕目 狭鞆川下流島山の場

役人替名

一徳岡村の義助 一土鼠の善太

一息女照姫 竹本連中

○本ふたい通りの大高二重、岩組の蹴込み、二重より上手寄に二間の突出石、此上に松の柱松葉葺の小家、前側に抵の簾を下し、向ふ早瀬の流れを見たる險岨の山の遠見、下手松林畫心の前へ乗り出したる松の立樹迄にからみし蔦がづらの蔓さがりあり、舞臺浪布を敷き、すべて島山の体、此見得一セイ山嵐にて幕明く「ト誰かよりの上るりに成り」上るり」瑤臺霜滿り一聲の玄鶴空に啼く巴峽秋深し五夜の哀猿月に叫ぶ物凄まじき深山かな、時しもあれ夏も過ぎ木の葉時雨の秋更て路も絶たる島中に去年より住る一女あり如何なる人の身の果か事とふもの之松風に傾ふく軒のつもの間も朝暮讀經の聲ばかり殊勝にみえて哀れ

なり「ト此時前側の簾を捲上ると内に照姫サラ毛の束ね壊れたる前幕の着附けにて蒲の庭の上に住ひ經卷を披き讀經の見得此時思入あつて」 照姫「憂かりける此世のさかの秋の暮露も時雨も身にや添ふらんと定爲が和歌ならねども何如なる過去の業因にや我領内に斯てありながら四方を遠れる急流の流れの爲に隔てられ路の絶たる山中に住憂き身とばあじきなく送る此の世の苦患を思へば未來の程の恐ろしく朝暮ねがふ罪障消滅南無阿彌陀佛」 上るり「南無阿彌陀佛も涙なる聲さへ曇る夜の雨晴間を待て立歸る義助もあやし姿どは變り果たる世の中に捨られし身の命をば繋ぐ木の實を片手に提げ歩むも難き岩角傳ひ」ト此上るりにて義助葉束ねの壊破れたる着附け繩帯片類に火傷の痕ある拵らへにて手造りの提籠に木の實を入れ片手に秋の草花を持出て來り」 義助「姫君様モウお目覺でムり升るか」 照「チ、義助今戻りやつたか」 善「サアお聞下さりませ昨夕の雨にモシ萬一して放れ船でもあろうかと此兩股川の落る例もの山で見張ては居りませしが未だ御運が來らぬと見えまして昨夜の雨にも姫君様船一艘も見當りませぬわい」 照「何の運が開かうぞいのウいかなればこそ此照姫母に別れし比より兄の御亂行此改心のあるやうと神に祈り佛に誓ひし甲斐もなう悪人們の奸計にて斯る憂目を見るも皆前世からの報いにて神佛にも棄られし照姫が身を思ひ廻せば寧ろ死たい死たいわいのウ」 上るり「いつと死とう思ふぞ

と慨ち涙に暮玉へバ義助も道理と泪ぐみ」 義「お道理でムリ升る毎度申やうなれど此義助めも在所にて一人の味もムリ升れどお國の爲には替がたしと御覽の通り顔も手足も焼け爛れ生れもつかぬ不具に在るまで危うい命カラ〜お助け申せし甲斐もなく此身に小刀一本でもムリましたら松杉の枝を切ても筏一組作り立御殿へお供致しませうに身に附着た物とては貴嬢が肌身に着なされし其經巻と此義助が其日に拾ひし密書の一通、それも永い月日の中には世に出る時節もムリませう夫を何うぞ楽しみにお待なされて下さりませ、明ても暮ても御身を悲しみ若し御病氣でも出ましたら義助は何と致しませう、ハ、と私とした事が由ない縁言粗庵者といふものゝ他愛もないとお心で之無可笑しうムリませうハ、ト涙を笑ひに紛らし」違ひない肝腎の物を忘れて居りました姫君御覽なされませ誰ぞて種は詩ねども時知り顔に岩間々々に咲乱れたる秋の草花なんとしはらしいでとムリませぬか」 上るう「と何につけても姫君を大事と思ふ心より差し出す草花兄問さもやらず」 義「妾が愛さ心を慰さめんどの志は照姫姫しふ思ひ升れど兄秋政殿の邪まより年頃の歎きをおもへば春の花秋の草とて楽しからず身の慰みは民への恐れ見ると泪の種どかし」 義「有難うムリ升る能う仰しやつて下さりました其お慈悲深いお情が切て半分殿様のお心にムリましたらお國の町人百姓が今の難義も致しますまひエ、天道様も聞えぬわい」 上るう「天

を仰いで悔泣き姫も泪に聲響らせ」 姫「チ、道理がやわいのウ自とても夫のみが心には懸れども道も絶たる山中に唯さへ秋は物憂き民の心をおもふ程悲しき秋と孤島に棲む妾が心の裏推量してたもいのウ」 上るう「推量してと御袖を顔に押當て給ひたる御心根ぞ痛わし、義助も道理と思へども斯てと果じと氣を勵まし」 義「ア、思ふまい〜何ぼ貴女のお慈悲をば天下に知したとて夫がかなふ身でとなし唯此上は天道任せにお命さへムリましたら世に出る時もムリませうマア採て戻つた此木の實お上りなされて下さりませ」 姫「チ、忝けない一日命を繋ぐも皆そなたが庇蔭の此養ひ忝けなふ頂戴しますわいのウ」 上るう「押載らし照姫の顔をつく〜打ながめ」 義「マアお痛わしや世が世の時であるうなら三度〜の御膳部も係りの衆が吟味をなし膾炙味の物を上らうに五穀の無い悲しさには木の實に其日の命をつなぐ柄をば食の此上なき」 上るう「數の珍味と思召す御心根の痛は〜や。夫さへあるに鎮守の堂より尙だ結構な御殿に引替へ眞菰の簾に石疊」 上るう「松の柱に傾むきし松葉の家根に雨露を凌ぐ御身の有様と野末の小家の非人にも、遙かに劣りし御苦勞も世の成行とは言ひきから」 民「是が信濃の領主なる、三枝様の姫君か如何に御運の末じやとて餘まりでムリ升わい」 上るう「なんの因果と姫の身を悔み涙に暮ければ照姫も涙ながら」 姫「是も民を寤めし兄の非道を憎ませ給ふ天罰の此身に報ふて五

穀をば食する事もかなぬ身に成果し妾と諦らめて居る程に汝も必ず悔むでたもんな

義「へい」 姫「其營敵どもおもふ秋政の妹を斯迄に勤わり冊づく志と臣下数多ある中

にも其方程の忠義を見ず今にも妾世に出なば照姫が生涯の良人と定むるものは其方より他

に赤い頼て時節の来りなば足ぬながら妾と女夫になつてたもいのウ」 上る「面はゆ氣

に宜へハ義助は愕然」 義「滅相な事おツしやりませ御領主様の姫君様が此義助を見るや

うを匹夫下郎の水呑み百姓第一此面像を御らうじませ畢竟此面あればこそ今にも運が向ひ

貴女のお供いたすとも一年越に此島にお妙齡の姫君と一ツに居つても猥らなことをなごわつ

た様には疑がふものもあるまいと思ふて居る義助に何日にないお戯れ御冗談を仰しやり升

な」 上る「取ても附ぬ挨拶に姫は猶も羞かしながら」 姫「其様な妾にしたも元とどい

へば妾ゆへ命の親の汝ゆへ志の飽氣なさ」 上る「夕べの夢の覺る間も忘れがたなき我思

ひ、嗚や人が見るならばわりし妾何處へやら嫉捨山の姥どとも、苟且にも女の口から戯ひ

れた此様な耻かしい事が言れやうか推量してたもいのウ」 義「途方もない事おツしやり

ますな、思召しの段は有難うはムり升れど國の難義を思ひ升れば其處どころでとムりませ

ぬわら」 姫「其國の爲をおもふ眞實心に妾は」 義「スリヤどうあつても姫君にこ」

姫「夫も今の事ではない運にかなふて再び世に出る時あらば兄秋政殿に異見を加へ國安

体の其後は」 義「へいお國の政治さへ直りまして御領内の者共が安堵致す時節もわらば

又何如様ども其節にはお話しをいたしませう」 姫「屹度變つてたもんないのウ」 義「

臍の緒切て此義助未だ偽りといふことは知らぬ男でムり升る」 姫「嬉しいわいのウ」ト

是を涙の音烈しくなり橋懸りより善太の乗りたる前幕の船流れ出て来り岩角にて止まり」

善太「ヤレ恐しや」夜明け前に松崎の渡し場で民藏めが手に捕へられたら悪事の破帯

爰が一生命と此出又庖丁で纜を切たて好れと掉もなく此狹章川の矢を射るやうな早瀬の

儘に流されたが眼が眩暈ふて耐らぬわい」 上る「捕へし蕨を生命をとワナ」善太が肝

張聲フツと耳に入りけれバ」 義「ハテ心得ぬ鳥獸の其他には絶て聞えぬ人聲の」 姫「

劔に響いて聞ゆるこ」 義「萬一船の便りでも」 上る「飛び立つ思ひに俯視せば」

義「ヤア汝と」 上る「といふ顔善太も見て驚愕」 善「ハ、ハ、妖怪じや」 義「成程

人も通ぬ此山ゆへ然う思ふも尤もなれど實は去年の山津浪に流れて来た九里の者船と人と

見るも戀しいマア此處へ上つてムんせ」 上る「存分知つたる善太をば賺して事を謀らん

と欺むく言葉に安堵奇し」 善「夫は似た事もあるものじや實は小哥も昨夕少許イヤサ少

との降と思つたに水瀬の速さに楫を取られて流れて来たが天の助けの蕨蔓命一ツを拾ふた

わい」 上る「地獄で佛に逢たる如く藤蔓かづらに纜を繋ぐ間こなたは姫君に呷やき獸頭

き一物のありとは知らぬ土鼠の善太を傳ふて這ひ上り、ヤレく嬉しや、マツ是で命一ツ取り止たといふものぢや」 上るう「言つゝ姫を見て愕然ためつすがめつ不審顔、コレゑらひ美しくい娘だが夫は一体貴様の何だ」 善「彼女か彼は予の女房ぢや」 善「貴様の

の女房ハ、馬鹿を言へ何んな周章た山の神でも二タ目で見られぬ其面の貴様と書に見た小町のやうな此美くしいもの、亭主といふ其容貌か」 善「成程爾う思ふも尤もぢや實之女房とは己一人極たのぶ當人を得不得心だ」 善「ソレ見たか誰が貴様のやうな化物に」

善「コレ然う見下げたものではない是でも原は國一番の樂平男さついでのものであつたれど三年前の酒の上圍炉裏へ倒け込み此通り大怪我をしたをれを扱々好い女房は持たいたもので何を隠そうアノ女は隣村の神職の娘で、ナア、羞かしながら乃公と」 善「コウくく其面でかアハ、ゑらひ蛇に見込れたものぢや、成程神主の娘といへば巫女らしいところもあるがシテ又どうして此島へは」 善「其處が話しぢや尾つ廻しつ口説ても小母のいふ

こと聞居るまいがな」 善「ナ、尤もだく」 善「乃公も男と生れたからは思ひ込だも一念徹さで措べきと然も去年の五月の事寐鳥を刺そうと忍び込み家内の者に見咎められ若し捕へられては一大事と支える奴を切て棄此女を引撥へ逃たせく」 善「何處迄逃たのぢや」 善「其夜と翌日一日逃げのびて水の枯たる狹草川をやうく船に乗つて出た所

が二十八日の夜の津浪ぢや」 善「そんなら姫君殺さうとした一條で」 善「ナニ姫君とて」 善「イヤ夫から後と何うしたのぢや」 善「船は岩に打碎かれ既に溺れて死すべきところ女を抱へ命からく、此島へ上つた所が船は亦し再び里の浮世へと出る事かなわぬゆへ去年から一年越木の實で命をつないで居るも何うぞして想ひの念を徹そうばつかりどころが未ぢや情の強い女子で手さへ持ば此川へ身を投て死ぬとぬかすぢや」 善「ム、尤もぢやく」 善「いかな予も根負けして向ふよりは寧ろの事叩き賣て金にせうと思ふところへ此方の船の便宜を得た幸ひなんと二人の衆を乗て往ては下さるまいか」 上るう「實しやかに乗あげし話しに善太はフツと乗り」 善「何といふそんなら女が得心せぬのに困り果て賣心か此善太が人殺しの罪を負ふたも原はと彼の女ゆへ賣にせよ安い金では賣ぬの

ぢやシテ何位に賣るつもりぢや」 善「三百兩なら賣りも仕様か」 善「此娘己が買ふ」 善「アハ、失禮ながら其体で三百兩といふ大金持そうな人でもなし」 善「エ、輕蔑るなへ今にとゑらひ出世をする土鼠の善太といふ男金なら五百が三百でも二ツ返事で貸てくれる處があるのだ」 善「シテ其先く」 善「イヤ夫は此女が善太様の女房になりて身を任すといふならば井は女夫の間柄随分話さぬに限らぬが然もない内は迂濶に談しの出来ぬへ事だ」 上るう「いふに義助が眼配せに姫は悲しき涙をかくし」 今どうぞ

より妾を汝の妻にしてたもいのウ」 上るう「身を震わして寄り添へば」 善「そんなら爾々得心して乃公が女房になる心か」 姫「サアどうぞ其方の好いやうに」 善「必らず見捨ておくれなへと吐そうがな己れ」ト吞込ますやうに云ふ」 姫「必らず見捨ておくれなへ」 善「早う出世の様子を聞いて安心さして吐そうと思ふてけつかるわ」 善「早う出世の容子を聞いて安心さしていなア」 善「ナ、聞いてやる」譯は斯うじや聞てくれ、此處の領主の家來に熊澤丹下といふ人がある其人が主君を押籠め其妹御の照姫といふを口説落して此三枝の家國をば一ト呑みに仕様といふ目論見其照姫が得心せず棄て置れぬ邪魔者へへ去年五月二十八日佛參の際を伺ひ床下に火を放ち狭章川の止めたる水を切て落水責火責で照姫を到頭殺して仕まつたが此大望さへ成就すれば一廉の武士に取立られる此善太金が入るなら遣わそう何時でもとの約束で一味をして居る此善太何と服装ここんなでも素敵の身分であらうがなア」 上るう「身の大事をも打忘れ談す言葉を聞さすまし」 善「そんなら去年の洪水も」 善「サア又其水が今夜不思議な媒合とは深い縁といふものじやシテ化物貴様は名を何といふ」 善「おれか乃公は徳岡村の義助といふ百姓じや」 善「何をぬかすぞい其義助なら馴染の男汝のやうな面玄やあいわい」 善「此妾になつたるも原はといへば汝ゆへ」 善「なんと」 善「此手紙覚えがあるか」ト前に拾ひし密

書を見せると」 善「南無三それ」ト取んとするを義助善太の首筋を捕て押へ」 善「動きさらすな大悪人め、此御方を誰かと思ふ三枝秋政公の妹君照姫様と知らざるか、去年おのれが落したる密書にて様子分り姫君様を火中よりおすくひ申せし此義助が悪人等のお家を覗ふ企だでの証人におのれを爲さん義助が計策さうとも知らず口走つたこそ今日迄憂き命を存らへし甲斐あつて熊澤丹下が悪事をば見顯はしたるのみならず船の爰に流れ寄りしは今ぞ御運の開け口姫君様お喜びおさされませ」 善「コリヤモウいつそ」ト出又にて切てかゝるを立廻つて義助善太の脇腹を當て」 姫「是といふも義助そなたの誠心を天道の憐れみ玉ひしものならん」 善「此上は猶豫せずお家を覗ふ悪人等の謀計をば一々に言上なし諸人の怨み晴さいで置べきか」 姫「いふにや及ぶ義助早う」 善「心得ました」 上るう「天にも昇る喜こびは死たるもの、蘇生り娑婆に出たる如くあり」ト天を拜して喜こぶ」 上るう「土鼠の善太息吹返し」 善「おのれを遣てたまるものかい」 上るう「御懸すまふ組附くを早速の義助ひんすと驚掴み」 善「姫君御用意」 善「合点じやわいあア」 善「なにを」 上るう「勇み進んで」 義助と善太を藤臺にし縛しめ照姫と身繕ひをする」此模様よろしく三重一セノ波の音にて〇拍子幕 後山嵐にて繋ぎ早幕にて引返す

八幕目 霜河原刑罪所の場

役人替名

- 一 智隈村の民藏
- 一 三枝秋政
- 一 信濃屋清七
- 一 妹お才
- 一 熊澤丹下
- 一 宮津六郎治
- 一 陶兵馬
- 一 渡邊金兵衛
- 一 戸田權兵衛
- 一 瀧島要平
- 一 仕出し大勢
- 一 足輕二人
- 一 半番人二人
- 竹本連中

○本ふたい平舞臺、向ふ一面竹矢來、所々に小松の立樹、すべて霜河原刑罪場の模様、爰に町人百姓の仕出し大勢立懸り居る、此仕組宜しく時の太鼓にて幕明く、「ト向ふより三枝秋政野袴ぶつささ大小の拵へにて丹下、兵馬、金兵衛、權兵衛、要平、何れもぶつささ大小の拵らへにて出て來り」 丹下「唯今打たるは午の上刻」 兵馬「君には設けのお床几へお着あつて」 四人「然るべう存じ升る」 秋「チ、ト舞臺へ來り秋政中央の床几にかゝ

る」 丹下「我君御越の上之方一見物人に粗鹿なきとも申されねば」 金兵衛「非常の警固嚴重に」 四人「致されよ」 足輕「ハ、ハア、」 秋「信濃屋清七とかいへる奴余へ不禮を働らさし土民めに成替り人質に相成りしが今に本人立歸らねば時を延さず人質清七を罪に行なひ然るべしと六郎治が勤めに任せ見物致すも又一興何と好い慰みではないか」 兵馬「實に君の仰せの如く我々共に到る迄斯様な慰みはムりませぬ」 金「然し定めの時刻には今一時とは申ながら」 權「時を移して我君のあたり興を醒すも如何」 要「最早お刀のお試しを御見物あつてを」 四人「如何にムり升る」 秋「チ、茲へぞ申せ」 丹「ソレ我君の仰せでムり升るぞ」 兵「囚人はへ」 足輕「ハ、ア科人、お引なされ」 「ト是にて向ふ戸家の内にて」 牢役人「キリ、歩め」 「ト是より説教がかりの床の上るうに成り」 上るう「哀れや清七は我科ならで信友の義理にからみし縛めの繩を其身に代りたる定めの時も近附し屠所の歩みの未の刻曳き行く駒も唐土にもかゝる例は踏聲に上みを罵る見物を押分け、牽れ來る身の成行ぞいたわしく」 「ト向ふより清七本繩にかゝり半股引大小の牢番役繩を把り宮津六郎治ぶつささ野袴大小の拵へにて仲間一人棒鞘の刀を持ち出て來り直に本ふたいへ來り」 牢役「下に居らう」 上るう「聲も鋭どさ獄卒に引据られて刑所の場最期も近しと見えにけり六郎治は手をつかへ」 六「ハ、我君へ申上奉る未

だ未の刻は打ねども今に歸り來らぬ土民必定是は清七めを代りとして逐電なせしに相違なし大切の科人を取逃せし罪十倍なし逆磔にも行ふべきを上み格別のお慈悲を以て斬罪に行う清七唯今召連ひなり君には應御待兼にムりませう」 秋「サ、今日の役目大難にこそあれ余に無禮を爲せし土民なれば秋政直々手を下し新刃の切味試さんもの取逃せしは此奴が科時刻の相違は苦しからず余が許す」 丹「ソレ六郎治殿我君の仰せでムる」 兵「早く死刑に行かぬれよ」 六「仰せ迄もなく争で猶豫仕らんや」 上る「いひつゝ清七に打向ひ」ヤイ清七面を上い、イヤサ面を上げい科の次第は牢内にて唯今申聞せし通り輕からざる囚人を取逃せし汝が科豈夫お上を恨みとは存すまい」 上る「權威をかさに言ひ聞せば清七少ツとも悪びれず」 清「素より死罪に極まりし科人に代りしからは命は捨る覺悟の清七何とてお上を怨みませうや時刻は八ツのお定めあれど時來らぬ内片時も早うお手討になされて下さりませ」 上る「覺悟極めし清七が願ひに宮津笑壺に入り」 六「サ、流石と清七好い覺悟ソレ刀を持って」 仲間「心得ました」 上る「今が最期と下げ緒の磔十字にあやどる其時しも情交ある中の清七が身を氣遣ひし女の一心倒つ轉びつ斷け來るお才夫と見るより走り寄り」トお才向ふより走り出て來り」 お才「お願ひの者でムり升くわいなア」 平「シテ其方は」 皆々「何者あるぞ」 オ「ハイ私は」 上る「涙に後も

言ひ兼し顔を始めて打視やり」 六「實に汝は」 清「お才どのか」 オ「清七さん逢たかつた逢ひたらムんしたわいなア」 上る「膝に取り附き泣入れは六郎治眼に角立」 六「ヤア君の御前とも憚らず見苦しい其泣面ソレ矢來の外へ放り出せ」 足輕「心得ました」 秋「ア、コリヤ待て〜」 六「我君何故お止めなされ升る〜」 秋「去れば唯今見受し所が何か仔細のありそうな彼が容子」 六「仔細と申すと他ならず是なる女は徳岡村の義助と申者の妹にて名をお才といふ年齢に似合ぬ淫奔女にて是なる清七と野合ひ拙者が望みを〇イヤサ望みあつて願ひ出しと言すと知れた清七が今此様を悲しむで來たるに相違なし我君追ひ斥退けませうや」 秋「左様な情交ある中の女とあれば彼の最期を喜こびも致すまい秋政未だ人たる者の悲しみを存せず好ま折りの一興なれば苦しうない泣して見せよ」 六「是は又いかな事君にこそ是なる女めを面白い物のやうに思し召せと拙者など見るも小胸の悪い穿鑿」 丹「アイヤ六郎治殿何も時のお慰さみにムれば」 皆々「諸事は君の」 四「御意次第」 六「然うはならぬ、ソレお才を是へ〜」 上る「面膨らして控へ居るお才は人目も羞やらで」 オ「モウシ清七さん淺間敷いお姿にお成りおされましたあア、民藏さんが久々にて戻つてムんして様子を聞けば斯々じやと詳しい話しの悲しさに其儘内は耻け出たれど何をいふにも夜更にて渡去船の便宜を得ず狭章川の堤をばウロ〜と

して夜を明しやう／＼超えて五里の路をば息をもつがす走つて来て見れば今があなたの御
 最期とは是も大方戀のかなわぬ遺恨に依て六郎治が」上るう「といふを押へて」
 造ア
 、コレお才どの滅多な事を言つしやるな素より夫を承知にて民藏さんに代りしは上みの刑
 罰受る心体必らず悔んで下さるな」
 造「いかに覺悟の上なれば是迄の縁と諦め好
 の人質になつたのでムんすかいなア」
 造「いかに覺悟の上なれば是迄の縁と諦め好
 い所へ縁附て下されや」
 造「氣強い事をいふて下さんすな貴郎を死して他所外へ縁附妾
 に心があらば何の悲しう思ひませうぞいなア」
 六「ヤアべん／＼と長たらしいよまい事
 何ぼ泣いてもはざいても助かるべき命をらす尙其命ばかりでなく城下で富豪と聞えたる信濃
 屋の家は決所上みへ没收」
 造「オ、エ、」
 六「我君最早切ませうか」
 造「チ、切て仕ま
 へ」
 六「心得ました」
 造「オ、モシ待て下さりませ未だ時も参りませすモウ其間民藏さん
 にも」
 上るう「といふに清七眼をひらき」
 造「ナニ民藏さんが茲へ來るとか」
 造「さ
 いなア松崎の渡し場で逢ふたれども貴郎のお身の氣遣ひゆへ別れて來たも女の足モウ來ら
 れませうわいなア」
 六「何の民藏が茲へ参らう彼も昨夕途中にて〇イヤサ速もかなわぬ
 清七が一命」
 清「民藏参らぬ其間に早う斬て下さりませ」
 六「云ふにや及ぶ」
 「ト仲間
 の持つたる刀を取て立上る此時時の太鼓に成りお才指折り數えて喫驚なし」
 造「ヤあり

や定め」
 皆々「未の刻」
 六「エ、邪魔な女め」
 「トお才を蹴倒し」
 上るう「既に斯う
 よど見へたる所へ」
 「ト是をバタ／＼に成り向ふより民藏前幕の捲らへにて走り出て來り」
 民藏「しばらく／＼民藏唯今立歸りましてムリ升る死刑の罪人私を斬て下さりませ」
 「ト秋政思入あつて屹度成り」
 秋「望む所の匹夫の民藏予が直々首刎くれん」
 民「夫は
 私も望む所サア切て下さりませ」
 秋「云ふにや及ぶ刀を持テ」
 六「心得ました」
 「ト棒
 鞘の刀を渡す」
 清「ア、モウシ殿様マツお待下さりませ此民藏の罪といふは放火盜賊し
 たといふにも非ずね國の爲をおもへばこそ君に訴へ不禮の所行したとやら何卒此民藏さん
 の命だけ私に代らして下さりませ」
 民「其御親切を添けなけれど日毎にお國の困窮を
 見て居るつらさ悲しさより寧ろ死だか優であるうと覺悟極めた此民藏」
 清「そりや無理
 でもないが腰さへ立ぬ爺御前に眼かいの見えぬ母御のある上永の病氣のお内義乳香子其四
 人を手一ツで養なふお前が死しやつたら唯さへ暮の立ぬ時節に何と命が保たれう」
 民「
 イヤ夫は案じて下さるお其両親には勘當受け又女房は去つた上からは心残りのない民藏」
 清「そんなら両親にもお内義も」
 民「ナイのふ」
 上るう「氣を張りつめし民藏もたも
 ち兼たる恩愛の涙にくるれば熊澤丹下其他の諸士等もどかしがり」
 丹「君には如何遊ば
 されしぞ民藏参る上からは」
 六「少しも早く」
 皆々「御成敗を」
 上るう「杓も變らず

倭人の勸むる詞秋政公何思ひけん黙然と答へもなくてお在ける民藏猶も斬れる覺悟」

民「モウシ御見物の皆の衆此民藏が悪い事して切れると思わしやろが決して然ういふ譯ではムらぬお國の政治と御家來委せ奢りと殺生の重なる上に去年からの不作にも掛構ひもな
く年貢の取立目も當られぬ下々の困窮どうを御政治の御改革が願たいと御異見申せし科に
依つて死刑に極まる此民藏 清七どのが死に代らんとの深切も義理と義理との持合ひ此世
中の人情は捨てはならぬ元より仕置も覺悟の上滅他に清七さんお前之殺しは致しませぬ
」 清「然うでもあろうが何うぞ私を」 民「イ、ヤ民藏を」 清「清七を」 民「イザ
御成敗」 兩人「おされませう」 上るり「義理と義理との中央に挟まれし身の秋政が心と
熱湯焼熱の責に比し苦しさをチツと耐ゆる主君に向ひ」 丹「イザ御成敗」 皆々「あ
そばされませう」 上るり「猶も勸むる倭人が言葉と耳にもかけず何思ひけん秋政公新身の
刀拔より早く縛めの繩切放てば是はと計り驚ろく人々」 清「ヤ、スリヤ清七の」 皆々「
縲纒をば」 秋「本人出る上からは汝に罪なし、秋政思ふ仔細もあれば民藏兩人取逃さぬ
やう館へ連よ」 皆々「シテ我君には」 秋「歸館の致さん供いたせ」 丹「コハ心得難
き君の御推シテ思召しの仔細といふは」 秋「エ、其方等の存じた事でないわ」 皆々「
デハムれども」 秋「エ、參れと申すに」 皆々「ハ、、、ト大小入の合方に成り秋政足

早に花道へ行く皆々顔見合せ思入あつて付添ひ向ふへ這入る三人跡を見送りて」 清「民
藏さん」 オ「兄さん」 民「何であらうか」 足輕「立ませい」 民「へい」ト愕くり
して平伏するのが木の頭三人合点のゆかぬこなし此模様合方にて 拍子幕

大 詰 三枝御秋政改心の場

役 人 替 名

- | | |
|-------------|-------------|
| 一 徳 岡 村 義 助 | 一 戸 田 權 兵 衛 |
| 一 三 枝 秋 政 | 一 瀧 島 要 平 |
| 一 信 濃 屋 清 七 | 一 侍 女 莉 藻 |
| 一 服 部 宮 内 | 一 同 莖 浦 |
| 一 妹 照 姫 | 一 同 歌 浦 |
| 一 中 老 静 江 | 一 同 琴 柱 |
| 一 宮 津 六 郎 治 | 一 智 隈 村 民 藏 |
| 一 陶 兵 馬 | 一 侍 四 人 |
| 一 渡 邊 金 兵 衛 | |

○本ふたい通り常足の二重、塗かまち、見附け金襴後に引抜くと向ふ千疊敷の遠見になる

誂らへ、舞臺花道とも薄縁を鋪きつめ、橋懸ヶ戸家口とも杉戸の見切り、すべて三枚家廣間の模様、二重の上に宮津六郎治、平舞臺に敵役の諸士四人何れも麻上下の拵らえにて住ひ、早舞にて幕明く」 兵馬「シテ宮津殿の」 四人「御思案こな」 六郎治「各々お案志あるな王君秋政公刑場より其儘御歸館なされしはお館に於て御酒宴のお肴に懸り切りにささるとのお心でムろう」 兵「テハムれども竹田左京服部宮内あどを近づけ御密談は合点が參らぬでは」 四人「ムらぬか」 六「ハテ氣遣ひムらぬといふに」ト時計の音に成り奥より服部宮内摺上下の拵らへにて出て來り」 宮内「何れも我君のお越でムるぞ」ト是にて襖を左右に引ぬき奥より秋政羽織袴の拵らへにて近習四人褥脇息を持出て來り秋政は二重に住ふ六郎治思入あつて」 六「君には今日不禮の土民をお手ずから御成敗と思ひの外俄かに御歸館あらせられし如何の思召しにムり升る」 秋政「シテ兩人の者は參り居るか」 六「ハ、彼等は唯今引立參り廣庭に引据ましてムり升るシテ土壇の用意でも仕りませうや」 秋「イヤ苦しむない是へ呼べ」 六「デモ殿中にては」 秋「ハテ呼と申すに」 幸「ハ、」ト花道に向ひ「死罪の科人智隈村の民藏并ひに信濃屋清七兩人の者を急いで是へ」ト向ひ戸家の内にて」 侍「キリ」立上「ト向ふより清七民藏先きに侍四人附き添ひ出て來る」 秋「チ、兩人の者參りしか」 六「兩人共覺悟極めて」 四人「御前へ

出ませい」ト是にて民藏行うとするを清七止め」 清「ア、イヤ民藏殿からして二人がお館へお召しなされる上から何れ切るお心何うぞ予を先さへ遣つて下さりませ」 民「エ、滅相な事いはつしやれ何の罪もないお前を殺してよいものか夫へ往たら危険いはどに何うぞお前は茲に居て」 六「コリヤ」我君の仰せなれば兩人ども」 皆々「進め」 民「そんなら何うでも清七殿も」 清「アノ民藏どのにも」 二人「諸共に」 皆々「エ、參れと申すに」 二人「ハ、ハア、」ト侍と共に舞臺へ來る秋政ツカ」と二重より下りて民藏の手を取り」 秋「民藏是へ」ト二重へ招する」 民「そこで切れるのでムり升るか」 秋「イヤ汝に詫ねばならぬ秋政」 民「エ、何とおつしや」升る」 秋「マツマツ」ト民藏を無理に二重へ押上げ」民藏免せわやまつた」ト秋政平伏する」 皆々「エ、」ト顔見合せ呆れたるこなし是を誂らぬの相方に成り」 秋「我幼少より父母の慈くしみ深くして心の儘に生長せし故非道の政治に民を窘しめ是を諫むる臣あれば即座に手打又は閉門其秋政が無道を悲しみ親妻子をも顧りみず一命を投擲て強訴に及びし心体は感ずるに餘りあり又其方の命に代らんとせし清七が信義といひ揃ひも揃ひし忠心義心の誠實を盡せし志しには如何に天魔に等しき予も改心なさであるべきや」 六「ナニすりや我君にとお心を誂がへされんとな」 秋「いかにも十余年が其間慈悲も情けも辨まへざりし此秋

政が心に曉る處ありしも是全たく民藏清七等の赤心のなす處我爲に之父母にも優りし身の
鴻恩今より運上課役を免し永く民に慈悲の政ごとを施こさん唯是迄の悪政は免してくれよ
二人の者「ト詫る民藏二重より駈け下り」 民「滅相を御勿体ないマア」お手をお上げ

下さりませ〜我々がやうな取にも足ざる百姓不情の命に代へ領主様がお心を改めて下さ
りましたら夫こそ此身の喜びばかりか御領分下の大慶にムリ升る身の程も願ひみ交せず
御異見申した不禮の段お許しなされて下さりませモシ清七さんコリヤ夢でないかいなア

「清」夫といふも民藏さんの忠義を天より憐れみ自然と救ひ下さるといふはコリヤ尋
常ではムリ升ぬ」 宮内「寔は正直の頭には神や守るとの比喩の通り是より三枝のお家と
萬代不易あるぞよ、又悪人等奸計の段々露顯致せし上からは」 六「ア、イヤ宮内殿奸計

の露顯と仰せある其悪人ど何人を指て」 皆々「言るゝぞ」 宮「何人でもない第一番
に熊澤丹下并びに宮津六郎治」 六「なんと」 宮「其他是に伺公の面々何れも加擔人で

あろうがな」 六「ヤア聞棄ならぬ其一言夫にはなんぞ」 皆々「証據がムるか」 宮
唯今証據御覽に入れん、ヤア〜姫君をお供致せし徳岡村の義助恣いではへ「ト此時向

にて」 義助「畏こまりました「ト早舞に成り向ふより義助麻上下にてツカ〜と出て來
る」 六「ヤア証人どは何奴と思ひの外」 兵「面は人か化物か」 金「見るも却々穢ら

わしさ」 熊「かつたいに劣りし下郎」 皆々「何奴なるぞ」 義「私事は御領分徳岡村
の義助とて親代々の土はせり「ト此時奥より照姫廣袖振襦衣にて靜江つきに侍女四人附添
ひ出て來り」 照「我良人待て居たわいのウ」 六「ヤ然ういふ和女は照姫君」 兵「正

しく去年天眼寺にて」 皆々「御最期と思ひしに」 六「コリヤ何うして」 靜江「九死
一生のお生命を保たれしも彼ある義助が働らさにて不難に最前御歸館あそばし久々にての

御兄妹の御對面」 六「ヤ」 靜「コリヤびつくりもあろう筈死んだと思ひし姫君の御不
事も義助殿の皆忠義」 荊藻「姫君様のお待兼早う茲へ」 四人「ムんせいなア」 義

夫とわんまり高上り是が勝手でムリ升る」 秋「イヤ苦しうない秋政ゆるす進め〜」
六「宮内殿其許にも風邪で熱に浮されしか」 兵「マッ第一此男を証人とは」 熊「こい

つも狂氣亂心者」 要「キリ〜其處を」 皆々「立去り居らう」 義「だまれ六郎治今
此義助こんな面になりしも原は己れが皆仕業」 六「ちんど」 義「コリヤ此密書に覺

があるか「ト前まくの密書を出す」 六「ヤ夫は」 義「名宛は土鼠の善太へ六印より」
六「サア密書の名宛は六とばかり姓名確かに記さぬのみか土鼠の善太といへる奴名さへ

此方存せぬわい」 義「吐す六郎治其善太といふやつは元は汝が家來にて今は城下の蕪
昇人足、今引縛つて連れ來た此手紙が証據にならずば善太を爰へ呼び寄せやうか」 皆々「

皆々」

サア夫は 善「奸計の」々白狀するか 皆々「サア夫は」 善「サア」 皆々「サア」

「何とのがれと有まいが奇」ト諸士は無念のこなしあつて二人は義助に切

てかゝるを手首を捕へ、何だ是は言譯なさに此義助を切る心か滅多に此命は取れてたまる

ものかい」 諸士何を「ト振はなし又切てかゝる立廻りあつて又二人の諸士六郎治も切

せかゝるを諸士を殺げのけ六郎治をトンと當る」 宮「何と我君かゝる悪人を退せけんぞ

君を諫めて閉居の上切腹仰せ附られし梅澤右京の一命を竹田殿と申合せ人知れずお庇腹申

してムリ升る」 民「スリヤ梅田様にも御存命にて」 清「いかにも姉の差圖に依て我方

にかかまくまひ申てムリ升る」 秋「其者等につらかりしも皆佞人が勤めと思へば怨むべき

奸賊等、繩打て牢舎申附け「ト下手に控へし侍四人に諸士の肩衣を刎ねる」 兵「モウ斯

うなる上からは何如にも悪事に加擔したに相違なし」 金「其棟梁は熊澤殿にて」 善「

我々なごははんの膳に坐りしばかり」 要「シテ發頭人の」 四人「熊澤殿にて」 宮「

其熊澤丹下には唯今竹田左京殿討手として向われたり、ソレ引立い」 侍「お立なされい

「ト侍は諸士に繩をかけて下手へ引立運入る」 民「主君の御改心が何より嬉しひ國の悦

び」 造民藏さん 善「兄貴」 三人「目出度いなア」 秋「ソレ申附し品是へ持テ

近習「ハ、ト祝義の語になり近習白木の臺に上し上下大小を持出て來り民藏清七の

前に置く」 清民「是は何でムリ升」 宮「其方等の忠義を御威の餘り我君より下し給わ

る衣服大小」 兩人「エ、」 秋「又義助には差し古びたれども備前長船聲引手に取すで

あろう」 善「エ、」 秋「下腹ながらも其方が忠義を慕ふて妹照姫此秋政への願ひに任

せ今日より照姫を妻に遣わし家老の列に加へる心体又民藏清七にも當家の臣に取立なば適

ばれ役にも立べき者等唯今より予に仕へて猶も忠義を盡してくりやれ」 民「エ、滅相な

事をおつしやりませ先祖代々百姓の腹から生れて此民藏僅か計りの忠義立を致したとて士

分にお取立の仰せ至極身に餘り有難うはムリ升れど夫では却つて他領への聞えもあれば其

義は只管御免なされて下さりませ」 清「又清七とても其通り朋友の義理合へ生命を捨て

も盡すのが人たる者の當前夫をお上の御賞美に預かり士分に取立られて居りましては此後

限りがムリ升まひ唯私等の喜こびは身にも實にも替がたい主君の御改心が此上も無き身の

大慶」 善「就中土民の私風情が誰あろう御領主様のお姫様を女房に御家老なぞとて是計

りは義助をば助けると思ふて御料簡の程を」 三人「おねがひ申上る」 照「イヤ、

島にて約束と耐ういふ筈でとあるまいわいのウコレ靜江想ふ殿御に捨られて何と妾生さて

居られうぞいなア和女介惜たのむわいの「ト懐劍に手をかける義助びツくりして」 善「

モシ姫君様お赤たを死す位なら義助も苦勞をいたしませぬわい」 善「其心底なれば姫君

様のおねがひ通り」 義「じやといふて」 照「スリヤ島にて言ひしは偽言か」 義「サア夫は」 三人「サアくく」 照「國治まりし上ならばどの約束ではないかいのウ」 夫程迄の仰せをば否まば却つて姫君のお命にもかゝる事でムリ升れば仰せに隨ひ有難うお受け致すでムリ升る」 秋「此上は義助が妹ね才とやらが情交ある中の清七とと時とつての好き仕合せ今日秋政媒介なし姫諸共に祝言させん」 宮「何から何まで我君の御仁恵」 鮮「有難くお禮」 昔々「申上奉り升る」ト此時六郎治心附さ」 六「義助覺悟」ト切てかゝるを義助一寸立廻つて引つける」 秋「見よ宮内譜代恩願の者ですら國を乱す渠等に引替へて」 宮「國を愁ひて一命に代て忠義をつくしたる」 義「身は卑賤の農民にて」 民「身体は土に汚れても」 清「心は清き誠心より」 照「悪き政事を洗濯ひかへて」 鮮「民を恵みの上と下」 秋「其和合の婚儀を急がん」 義「シテ此奴めは」 秋「刀の切味試して見やれ」 義「ハッ」ト切打に六郎治の首を打落す」 照「アレエ、」ト驚き義助に取り纏る」 義「モシ斬ました」 民「コリヤ目出度今日の祝言に」 秋「皆の者目出度い」ト脇息を前に置く義助と何氣なく白刃を出す照姫袖にて押へる是を双方一時の木の頭」 義「是は憚かりさまでムリ升る」ト照姫と差かしさこなしにて白刃の血を拭ふ民藏清七は白木の臺を頂たく」此模様宜太鼓唄にて○拍子幕

演劇新編三枝譚 終

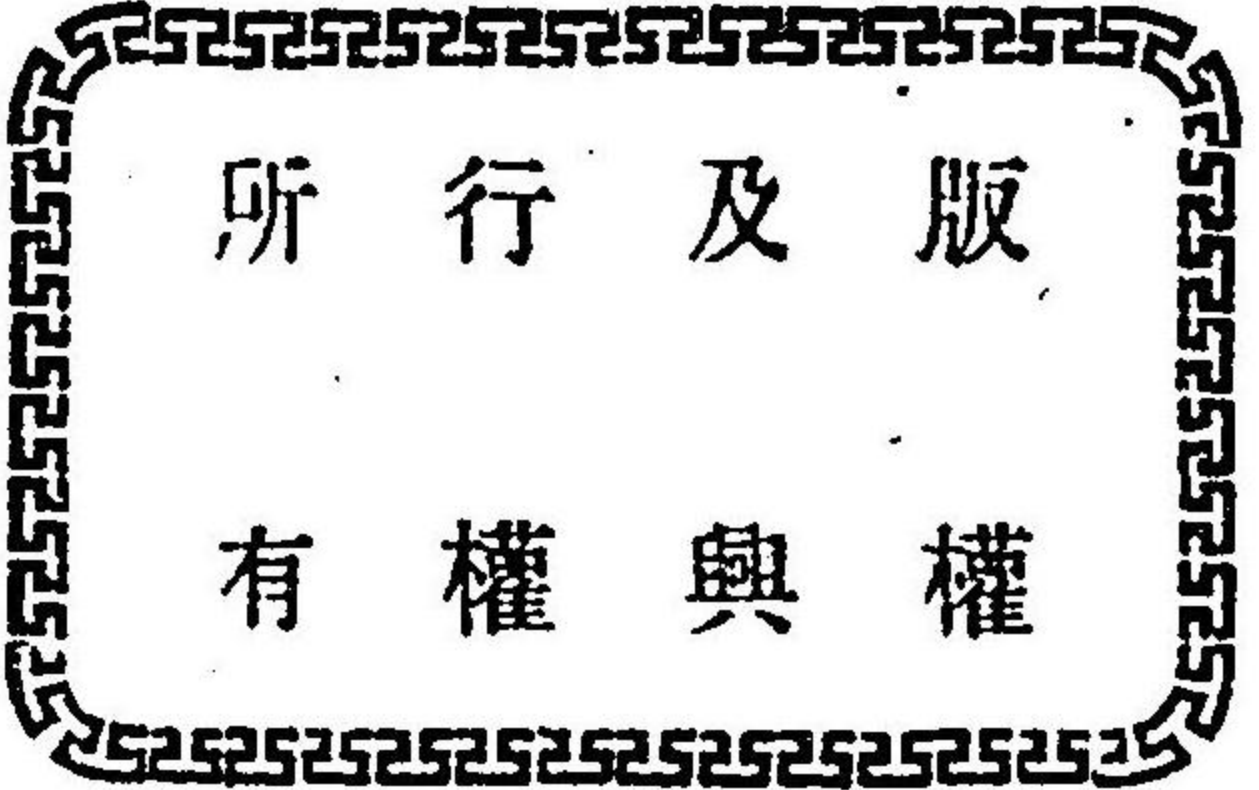
明治廿六年十二月十六日印刷

明治廿六年十二月廿三日發行

(定價十六錢)

大阪市東區備後町四丁目四十番屋敷 勝 諺 藏 事

著作兼發行者 勝 彦 兵 衛



印刷者 前 田 菊 松

大阪市東區内本町橋詰町六十八番屋敷 周 擴 合 資 會 社

